骨ものがたり

飛鳥資料館 学芸室のお仕事

「歴史や考古学を身近に感じて欲しい。」
「ひたむきに研究に向き合っているたくさんの研究員がいることを知って欲しい。」
そんな思いからこの展覧会の企画は始まりました。

「骨ものがたり」という展覧会のタイトルには、
「骨の研究から見えてくる歴史の物語」と、
「骨を研究する舞台裏の物語」の
2つの「ものがたり」を届けたいという思いを込めています。

多くの人には、奈良文化財研究所の研究成果が、
どのような過程を経て導かれているのか見えにくいのが現状です。
しかし、その成果にたどり着くまでの舞台裏にこそ、
歴史を読み解くおもしろさや、研究員の熱意が見える「ものがたり」があり、
それを知ることで、少し難しそうな歴史の話も
身近に感じられるようになると思います。

本展覧会が、「研究の舞台裏」といういつもとは違った視点から、
歴史や考古学の世界に興味を持ってもらうきっかけとなれば幸いです。

「骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕事」ができるまでには、
様々な試行錯誤がありました。
環境考古研究室の魅力や伝えたいメッセージを、どのようにかたちにしていったのか。
その舞台裏を「展示」「図録」「イベント」「広報物」に分けて紹介します。

さあ、もうひとつの「骨ものがたり」のはじまりです。

STORY

遺跡から出土した動物の骨や貝などの
調査・研究をおこなう環境考古学研究室。
その仕事を、6つの過程に分けて紹介します。

Process 1 出土する
|
Process 2 探し出す
|
Process 3 同定する
|
Process 4 観察する
|
Process 5 考察する
|
Process 6 記録する

さあ、「骨ものがたり」のはじまりです。

骨ものがたりのはじまり

「歴史や考古学を身近に感じて欲しい。」
「ひたむきに研究に向き合っている研究員がいることを知って欲しい。」

そんな思いからこの展示の企画は始まりました。
「骨ものがたり」という展覧会のタイトルは、
「骨の研究から見えてくる歴史の物語」と「骨を研究する舞台裏の物語」、
2つの「ものがたり」を届けたいという思いを込めてつけました。

これまで、奈良文化財研究所では、歴史をぬりかえるような研究成果を出してきましたが、こうした成果がどのような過程を経て導かれているのか、その現場は多くの人には見えにくいのが現状です。しかし、その成果にたどり着くまでの舞台裏にこそ、歴史を読み解くおもしろさや、研究員の熱意が感じられる「ものがたり」が隠れていると思います。そして、それを知ることで、少し難しそうな歴史の話も身近に感じられるようになる気がしています。

いつもとは違った視点で、歴史や考古学の世界に
興味を持ってもらうきっかけになるような展示をつくりたい…
そんな思いから、骨ものがたり展の企画が始まりました。

── 研究員を通して見えてきた世界。

私は学生時代に考古学を専門に学んでいなかったため、研究所で働き始めた頃は、発掘調査そのものだけでなく、使っている道具、扱っている資料、研究室の雰囲気など、目にするものの全てが新鮮で、興味深く感じました。その一方で、研究の専門性の高さから、正直、「難しくてよくわからない話」や「自分にはあまり関係のないこと」など、どこか距離を感じてしまうこともありました。

しかし、そんな私と考古学の距離を埋めてくれたのは、一緒に働いている研究員でした。日々の業務で様々な研究員と接するなかで、私がわからないことを質問すると、図や資料を使ってわかりやすく教えてくれる人ばかりで、研究員の口から語られる歴史の話はとてもおもしろく感じました。また、研究員の生き生きとした姿や目の輝きから、研究に対するひた向きな姿勢や熱意を感じました。そして、そんな研究員の存在を知れば知るほど、歴史や文化財研究の魅力に引き込まれ、難しくて少し遠い存在だった専門的な研究内容にも親しみを感じ、もっと色々なことを知りたいという気持ちになっていきました。

発掘調査や研究成果などは、その専門性の高さから、多くの人にとって馴染みがなく、魅力が届きにくいのが現状です。しかし、誰にでも理解しやすく、親しみやすいかたちに変えて発信することで、歴史や文化財が、より身近な存在になれるのではないか…そんな私自身の経験も踏まえた思いが、骨ものがたり展で「わかりやすさ」を大切にしたいというコンセプトにつながったように思います。

── 研究所のリアルな姿を写真で表現する。

2017年頃から写真室の飯田さんと一緒に、奈良文化財研究所の日々の調査研究の現場や作業のようすを写真で記録する仕事を担当するようになりました。この撮影では、単なる記録だけでなく、展覧会や広報などでも使えるような仕上がりを意識して撮影をおこないました。

撮影で様々な研究室をまわっていくうちに、仕事の内容や研究対象の幅広さだけでなく、「ああ、この道具をこんな風に使うんだ」とか「あの図面は、こういう場所で作られていたのか」など、研究室の「素」の姿が見えてきました。そして、このようなリアルな研究室の姿に、研究のおもしろさやユニークさが隠れていると感じました。撮影時にはその個性を大切にして、魅力を最大限に引き出すことを大切にしました。

また、どうしたら魅力を写真に収められるのかを考えた結果、撮影をする私たちが研究内

容や被写体についてもしっかりと理解しなければ、思いやメッセージが伝わる写真にはならないこともわかりました。私たちがやっていることは単なる「撮影」ではあるけれど、研究の意義を理解し、届けたい内容を整理することで、言葉では伝えきれない研究員やスタッフのひた向きな思い、研究の魅力などを感じられる写真になるような気がしました。

このように、日々の調査研究のようすを写真で記録するという仕事を通して、奈良文化財研究所の業務や個々の研究室の魅力、そして、それを伝えることの大切さに確信が持てたことが、骨ものがたり展で「写真を大切にしたい」というひとつの軸の形成につながったように感じます。また、骨ものがたり展の企画段階で、私と飯田さんの間で撮りたい写真のイメージがしっかりと共有できていたことも、展覧会でたくさんの写真を活用できた大きなポイントだったと思います。

──「一緒に展覧会やりませんか？」

作業風景の撮影で、環境考古学研究室にも通うなかで、研究員の山﨑さんから「環境考古学をテーマにした展覧会をやりませんか？」という提案をいただいたことが、骨ものがたり展企画のきっかけになりました。

環境考古学研究室は、奈良文化財研究所のなかでも、非日常感を感じる場所でした。初めて研究室に入った瞬間に独特の匂いがしたり（これは標本などの匂いだということを、後日知りました）、書類などを収納するキャビネットに動物の骨がたくさん並んでいたりと、ここでしか見られない光景に「こんな研究室があるのか！」と、とてもワクワクしたのを覚えています。また、研究室でおこなっている研究の楽しさや重要性をわかりやすく語れる研究員の山﨑さんも、この研究室の魅力のひとつだと感じました。

骨ものがたりの企画段階では、私が感じたこのワクワク感や感動を多くの人と共有し、環境考古学研究室の魅力を感じてもらえるような、環境考古学研究室だからこそできる展覧会にしたいと思っていました。そこで、研究室にたくさんの骨が並んでいる風景や、骨に囲まれながら研究する姿など、特にユニークさが際立っている「研究の舞台裏」にスポットを当てることを展覧会の軸としました。そして、山﨑さんだけでなくスタッフも気さくな人たちだったことから、研究室で働いている人が前面に出ることで、環境考古学という分野を広く発信しながらも、研究員との距離が近く、親しみを感じてもらえるような展覧会にするという方向で企画を進めていくことに決まりました。

── 展覧会をかたちにする。

骨ものがたり展をかたちにするうえで、普段から一緒に働く飛鳥資料館学芸室の研究員・スタッフの誰一人が欠けても展覧会はできませんでした。

解説パネルひとつをとっても、学芸室内で制作を担当してくれるスタッフがいたので、私のイメージ通りのものを作ることができました。展覧会のように複数のメンバーで何かをかたちにしていく仕事は、関係者間で価値観やイメージをどれだけ共有できているかが、その完成度に大きく影響します。学芸室では、見学した展覧会の情報や魅力的なデザインの本や雑誌など、良いと感じたことを意識的に共有し合うようにしています。このように、普段から価値観や目指す方向性を共有できていたことが、展覧会を企画する土台として大きく機能したように感じました。

また、学芸室にいる研究員の専門分野は考古学、建築史学、文化遺産マネジメントなどで、サポートスタッフも元家具職人や教員免許を持っている人など、様々なバックグラウンドを持つメンバーで構成されています。このように専門が異なる人が協力し合い、多角的な視点で検討することができたことも、より多くの方が楽しめる展覧会をつくるうえで重要なポイントであったように思います。

展覧会を終え、ふりかえってみると、準備期間中は「どんな展覧会にしたいのか」「ゴールやコンセプトを達成するために何をすべきなのか」など、悩んでいる時間の方が長かったように感じます。しかし、こうして展覧会としてかたちにすることができた裏には、飛鳥資料館学芸室だけでなく、環境考古学研究室や写真室、その他の研究室、そして所外の様々な方のご協力があったからにほかなりません。

たくさんの人と思いを共有しながら、心を込めてつくった骨ものがたり展。完成までは、日々検討を重ね、楽な1本道ではありませんでしたが、本書で私たちの取り組みを紹介することで、今後の文化財研究や活用などに資するものがあれば幸いです。

小沼 美結
（飛鳥資料館 学芸室）

骨ものがたり コンセプト

「歴史や考古学を身近に感じて欲しい」
「文化財に関わる調査研究のおもしろさを知ってほしい」

展覧会を開催するうえで、左の2つのコンセプトを軸に「何を」「誰に」「どのように」伝えたいのかという部分を入念に検討し、展覧会をかたちにしていきました。

What

展覧会で何を伝えたいのか？

環境考古学研究室の魅力を掘り下げ、私たちが何を大切にして、何を伝えたいのかという部分を明確にしていきました。

環境考古学研究室の魅力を整理する。

「研究内容や研究室のおもしろさ」
「研究員のかっこよさ」

動物の骨などから人の歴史を解明する
研究室のにおい
使う道具
標本作りが日常
骨の識別ができる
ひたむきに研究に向き合う姿勢
細かい作業
研究員の熱意
膨大な知識量

研究の舞台裏を見せる。

環境考古学研究室の魅力を以上の2つに整理しました。研究成果という「結果」の部分だけでなく、その成果にたどり着くまでの「過程」にこそ隠れているのではないかと考え、普段は見えない研究の舞台裏を見せることにしました。

How

どのようにして伝えるか？

研究に関する専門的な情報を、より多くの人が理解しやすいかたちで発信することに重きを置いて検討を進めました。

研究に関わる専門的な内容をわかりやすく伝えたい。
調査・研究の追体験を提供したい。

過程を丁寧に見せる。

研究室でおこなっている調査研究の過程を6つのプロセスに分け、順を追って紹介しました。

Process 1　出土する
Process 2　探し出す
Process 3　同定する
Process 4　観察する
Process 5　考察する
Process 6　記録する

調査研究ってどんな作業をするのか？
歴史を明らかにするアプローチとは？

写真で視覚的に伝える。

補足説明的な写真ではなく、専門的な情報を視覚的に伝え、研究室の魅力を感じられる写真を大切にしました。

ワクワクする
幅広い世代にわかりやすく
臨場感を味わえる

Who

誰に届けたいのか？

飛鳥資料館の現状や、今後の文化財のあり方などを考えながら、メッセージを届けたいターゲットを絞っていきました。

歴史や文化財に親しむ人の裾野を広げたい。
より多くの人に環境考古学室の魅力を届けたい。

本当に届けたい人は？
子供は？
興味を持ってもらいたい人は？

何かのきっかけさえあれば
歴史や文化財を楽しむことができる人たち。

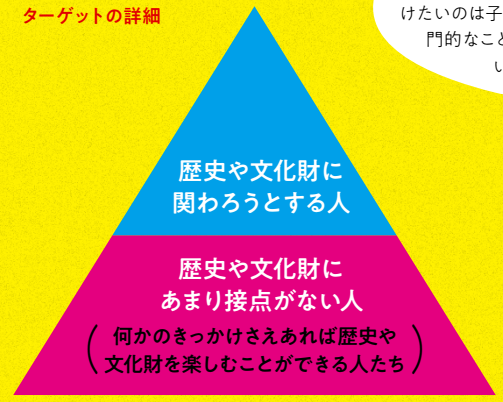
文化財に親しむ「入口」となれば、
歴史や文化財を文化財に親しむ人の裾野が広がる。

すでに歴史や文化財に興味がある人たちにとっては、研究の最前線や新しい情報を知る機会にする。
（研究の舞台裏は、歴史や考古学に詳しい人にとっても新鮮な情報となり得る。）

専門的、アカデミックな質も下げない。

企画の初期段階では、ターゲットが明確になっておらず、研究のおもしろさを知ってもらえそうな「子供」を意識していました。しかし、打ち合わせを重ねるごとに、私が本当に情報を届けたいのは子供ではなく、私のように「歴史に興味があるけれど、専門的なことを知らない人」や「考古学にあまり強い興味を持っていない人」であることが見えてきました。【小沼】

ターゲットの詳細



●歴史や文化財に関わろうとする人
・博物館によく行く人
・発掘調査の現地説明会によく行く人
・歴史や文化財などの専門書を読む人

●歴史や文化財にあまり接点のない人
・歴史や文化財は好きだけど、詳しく知らない人
・歴史に興味はあるけれど、少し距離感を感じている人
・歴史や文化財に強い関心を持っていない人

「歴史や文化財に関わろうとする人」と「歴史や文化財にあまり接点のない人」へのアプローチを最優先にしつつ、自然科学的な視点で骨に興味がある人が考古学的な骨の研究手法について学べ、研究員の仕事の紹介を通して、子供たちの将来の夢の選択肢が増える機会になればとも考えていました。

◯ふたつの「ものがたり」を届ける――タイトルの決定。

「骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕事」というタイトルは、展覧会のコンセプトやターゲットに合わせるため、1か月ほどかけて考えました。山﨑さんが骨に関連する過去の展覧会のタイトルを調べ、それらと被らないように注意しながら、学芸室で20個以上の案を出し、そのなかから候補を絞っていきました。

展覧会のコンセプトである「わかりやすく伝えたい」という狙いと「歴史や文化財にあまり接点のない人」をメインターゲットにしたことから、展覧会のタイトルも難しい印象を与えるものは避けたいと思っていました。

いくつかの候補のなかから最終的にどれにしようか迷っていたところ、デザイナーの大溝さんから、「骨ものがたり」がキャッチーで堅苦しくなく、この展覧会で伝えたい内容（「骨の研究から見えてくる歴史の物語」と「骨を研究する舞台裏の物語」）に合っているのではないか？というご意見をいただき、これをメインタイトルにすることに決めました。

骨ものがたり
環境考古学研究室のお仕事

タイトル案

~~「骨が語る人々の暮らし」~~
~~「骨が語る暮らし」~~
「骨に隠されたストーリー」
「骨ものがたり」
「雄弁な骨片たち」
「語る骨」
「骨からみえる昔の暮らし」
~~「骨が語る世界」~~
~~「骨が語る歴史」~~
→「骨が語る―」は、展示や書籍でとてもよくあるタイトル[illegible]避け[illegible]代」というキーワードもありかも。副題で「環境考古学研究室の―」[illegible]んのやりたいことに近づけられる？

「骨から古代を読み解く」
「骨を読み解く―動物考古学による古代へのアプローチ―」
「骨を読み解く―環境考古学研究室の●●―」

「骨から歴史を明らかにする―環境考古学研究室の挑戦―」
「骨から歴史を読み解く―環境考古学研究室のアプローチ―」
「骨を読み解く―古代の歴史を明らかにする舞台裏―」
「骨から古代を明らかにする―環境考古学研究室の舞台裏―」
「なぜ骨から歴史がわかるのか」
「なぜ動物の骨から人の歴史がわかるのか」
「なぜ骨から古代の歴史がわかるのか」
「動物の骨から人の歴史に迫る」

骨ものがたり―環境考古学研究室の舞台
骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕
骨ものがたり―環境考古学研究室の裏側
骨ものがたり―動物考古学研究の舞台裏
骨ものがたり―動物考古学研究の裏側―

当初は、「環境考古学研究室」という名前が一般的ではないことや、多くの人が難しそうなイメージを持つのではないかという懸念があり、研究室の名前をタイトルやサブタイトルに入れない方向で検討していました。しかし、大溝さんも含め打ち合わせを重ねるなかで、タイトルのどこかに「環境考古学研究室」を入れることで、研究室の存在や研究している分野について多くの人に知ってもらうべきなのではないか？と考え、サブタイトルに「環境考古学研究室」を入れて「骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕事」というタイトルが完成しました。【小沼】

◯奈良文化財研究所の展示づくり。

飛鳥資料館の展覧会は私たち学芸室のメンバーだけでなく、展覧会のテーマに合わせて、研究所の他の研究室と協力してつくっています。骨ものがたり展では、飛鳥資料館 学芸室を中心に、環境考古学研究室、写真室と一緒に準備を進め、木簡などの史料は史料研究室、展示する骨の保存処理は保存科学研究室など、必要に応じてその他の研究室にもサポートをお願いしました。

- 奈良文化財研究所
  - 企画調整部
    - 企画調整室
    - 文化財情報研究室
    - 国際遺跡研究室
    - 展示企画室
    - 写真室 ＊1
  - 文化遺産部
    - 歴史研究室
    - 建造物研究室
    - 景観研究室
    - 遺跡整備研究室
  - 都城発掘調査部
    - 考古第一研究室
    - 考古第二研究室
    - 考古第三研究室
    - 史料研究室
    - 遺構研究室
  - 埋蔵文化財センター
    - 保存修復科学研究室
    - 環境考古学研究室 ＊2
    - 年代学研究室
    - 遺跡・調査技術研究室
  - 飛鳥資料館
    - 学芸室 ＊3
  - 研究支援推進部
    - 総務課
      - 総務係
      - 財務係
    - 連携推進課
      - 経営戦略係
      - 広報企画係
      - 文化財情報係
      - 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地域）担当
      - 飛鳥資料館担当
    - 研究支援課
      - 宮跡等活用支援係
      - 施設係

写真室 ＊1
発掘調査時の遺構や出土資料などを撮影し、文化財を写真で記録しています。骨ものがたり展では、使用する写真の撮影や展覧会の記録を担当。

環境考古学研究室 ＊2
遺跡から出土した動植物遺存体（骨や種子など）から、人々の生きた歴史を研究しています。骨ものがたり展では、展覧会の学術的な部分の監修やイベント時のサポートを担当。

飛鳥資料館 学芸室 ＊3
展覧会やイベントの開催などを通して、発掘調査や研究の成果を発信しています。骨ものがたり展では、展覧会全体の企画・マネジメントを担当。

◯ひとつのチームでつくり上げる。

展覧会は、所内だけでなく、所外の様々な専門分野の人の協力も重要です。ひとつのチームとして展覧会のコンセプトや完成イメージを共有し、ときにはそれぞれの専門領域の壁を飛び越えて、意見を交換していくことも重要になります。今回は早い段階から、展示・図録・広報物それぞれのイメージを共有し、迷ったときにはコンセプトに立ち返りながら準備を進めていきました。

広報物や図録の制作時には、デザイナーさんに依頼することもあります。近年では、様々なデザイナーさんに、広報物だけでなく図録やカタログ、リーフレット類のデザインをお願いしました。展覧会でどのデザイナーさんにお願いするかは、予算やコンセプトなども考慮したうえで考えますが、基本的には主担当の意思を尊重する方向で決めています。外部のデザイナーさんから、文化財の世界にいる自分とは全く別の視点からの意見をいただくことも多く、文化財の魅力を伝える大きな力になると感じています。【小沼】

奈良文化財研究所

飛鳥資料館 学芸室

主担当：小沼

副担当：西田

石橋・若杉・辻本・美濃

環境考古学研究室

監修：山﨑

サポート：松崎

サポート：山田

サポート：坂本

研究室スタッフ

写真室

撮影：飯田

史料研究室

学術的な情報の確認

考古第一研究室

資料の管理・準備

保存修復科学研究室

骨などの保存処理

都城発掘調査部

発掘調査

所外関係者（デザイン）

グラフィックデザイン:
大溝裕（Glanz）

空間デザイン：
小西愛子

空間デザインをお願いした小西さんとは初めてのお仕事でしたが、こちらの意図を汲んだ上でいろいろなアイデアを提案していただき、何よりも展示の現場で、楽しそうに作業をされているのが印象的で、こちらまで楽しくなりました。【山崎】

骨ものがたり展では、Glanzの大溝さんにグラフィックデザインをお願いしたいと決めていました。大溝さんには以前に何度かデザインを依頼したことがあり、いつもこちらの狙いや思いを大切にしながらも「こんな表現があるのか！」という斬新さに 驚きを受けます。今回は、今までの考古学や歴史の展覧会にはなかったような図録や展示を作りたいという挑戦的な思いもあり、新しい取り組みを成功させるために、絶対に大溝さんの力を借りたいと思っていました。【小沼】

所外関係者（展示）

資料の運搬・陳列
日本通運株式会社 関西美術品支店

展示会場の造作
株式会社カマダ工芸

マグロ模型の制作
百寶堂株式会社

展示会場のライティング
にしでん

マグロの骨やテンパコ等の借用
気仙沼市教育委員会

※敬称略

図録・広報物の印刷
株式会社山田写真製版所

タイムスケジュール

Time Schedule

2018年12月 | 2019年1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月

広報物

デザインの方向性の検討
掲載する情報の検討

必要な写真の撮影・選定

レイアウトとデザインの検討・修正

色校正

印刷

ポスター、チラシによる広報開始

●2018年12月2日　打ち合わせ
大溝さん@環境考古学研究室

●12月28日
デザイン案完成

●2月下旬　印刷入稿

●3月11日　校了

●3月下旬　納品
(→全国の博物館等の施設へ配布)

●4月22日　報道発表

図録

構成、掲載する内容の検討

原稿執筆

校正

掲載する写真の撮影・選定

レイアウトとデザインの検討・修正

色校正

印刷

●2月下旬
デザイン案完成

●3月中旬　入稿

●3月26日
校正内容の打ち合わせ
@環境考古学研究室

●4月上旬　校了

●4月22日　納品

展示

会場全体の展示構成・ゾーニング検討／展示する資料の候補出し

ゾーニング・順路の確定
造作箇所の検討

解説や壁面グラフィッの検討
会場全体の動線確認

造作物（模型等）の最終調整
解説パネルの作成（文章執筆・デザイン・出力）

会場設営作業

2019年4月23日 展覧会オープン

造作箇所の検討

ケース内の展示レイアウト検討

ゾーニング・動線確認

解説パネルの執筆・デザイン作成

●3月27日
マグロ模型の製作打ち合わせ@百寶堂さん

●4月5日
ケース内のレイアウト最終確認

●4月15～16日
展示室の造作（by カマダ工芸さん）

●4月18日
資料の陳列（with 日通さん）

●4月19～22日
最終調整

イベント

イベント開催
❶ ❷ ❸ ❹

イベント内容、開催日時
イベントタイトル検討

開催日時、
イベントタイトル確定

イベントで使用する
資料の選定・運搬

「体験！研究員のお仕事
（子供向け）」の準備

「体験！研究員のお仕事
（大人向け）」の準備

❶ 5月10日（金）PM
❷ 5月17日（金）PM
「研究員を展示！」開催

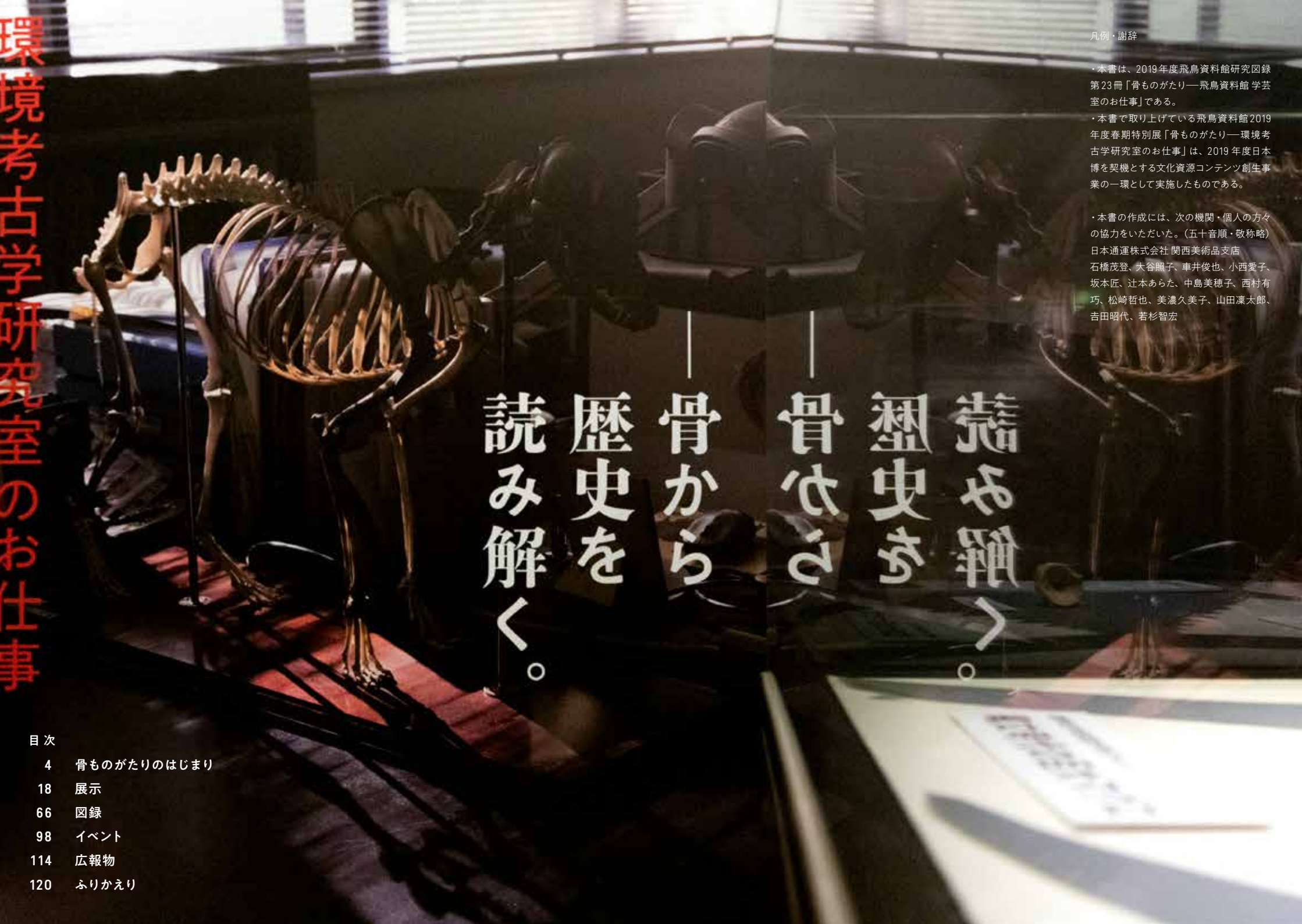
❸ 6月9日（日）
AM「研究員を展示！」開催
PM「体験！研究員のお仕事（子供向け）」開催

❹ 6月21日（金）
AM「研究員を展示！」開催
PM「体験！研究員のお仕事（大人向け）」開催

●6月6日
「体験！研究員のお仕事（子供向け）」打ち合わせ＆リハーサル@環境考古学研究室

●6月18日
「体験！研究員のお仕事（大人向け）」打ち合わせ＆リハーサル@環境考古学研究室

環境考古学研究室のお仕事



骨から
歴史を
読み解く。

目次

4　骨ものがたりのはじまり
18　展示
66　図録
98　イベント
114　広報物
120　ふりかえり

凡例・謝辞

・本書は、2019年度飛鳥資料館研究図録第23冊「骨ものがたり──飛鳥資料館 学芸室のお仕事」である。
・本書で取り上げている飛鳥資料館2019年度春期特別展「骨ものがたり──環境考古学研究室のお仕事」は、2019年度日本博を契機とする文化資源コンテンツ創生事業の一環として実施したものである。

・本書の作成には、次の機関・個人の方々の協力をいただいた。（五十音順・敬称略）
日本通運株式会社 関西美術品支店
石橋茂登、大谷照子、車井俊也、小西愛子、坂本匠、辻本あらた、中島美穂子、西村有巧、松崎哲也、美濃久美子、山田凜太郎、吉田昭代、若杉智宏

展　示

Environmental Archaeology Laboratory
Process 4 観察する
骨に残された情報を読み取り、手がかりを探す。
現生標本とは、現在生息している生き物を標本にしたもの。
標本の収集・製作
出土した骨が「何の動物のどこの部分なのか」を特定する。
Process 3 同定する

“研究の舞台裏”を知ってもらう。

「普段は見ることのできない“研究の舞台裏”を知ることで、歴史や考古学を身近に感じてほしい」というコンセプトのもと、多くの人にとってわかりやすい展示を目指しました。飛鳥資料館学芸室、環境考古学研究室だけでなく、グラフィックデザイナーの大溝さん、空間デザイナーの小西さんも交え、みんなで意見を出しながら少しずつ展示をかたちにしていきました。
何度も打ち合わせを重ねるうちに、「環境考古学研究室の研究内容や研究室そのもののユニークさ」と「研究員のかっこよさ」を展示空間で表現するためには、「研究の内容を整理する」、「調査のようすや研究成果を視覚的に伝える」、「リアルな研究室の雰囲気を再現する」ことが大切であるという結論に至りました。

研究の内容を整理し、わかりやすく展示。

「環境考古学の魅力」や「研究内容や研究室そのもののユニークさ」を、わかりやすく伝える方法として、研究成果を紹介する展示や、研究手法を解説する展示など、様々な案が出ましたが、研究の過程をよりリアルに伝えるために、環境考古学研究室でおこなっている調査・研究の6つのプロセスを順番に見せるという展示にしました。

導入

出土した骨から歴史を明らかにする研究の概要について、研究室にまつわる数字や骨から復元した原寸大の模型とともに紹介しました。

Process 1　出土する

発掘調査で骨がどのように出土するのか、また出土したときにどのような作業をおこなうのかを紹介しました。

Process 2　探し出す

発掘調査現場では見逃してしまいそうな小さな骨などを、土から探し出す作業について紹介しました。

Process 3　同定する

出土した骨が「何の動物のどこの骨なのか」を特定する同定の作業と、必要となる標本について紹介しました。

Process 4　観察する

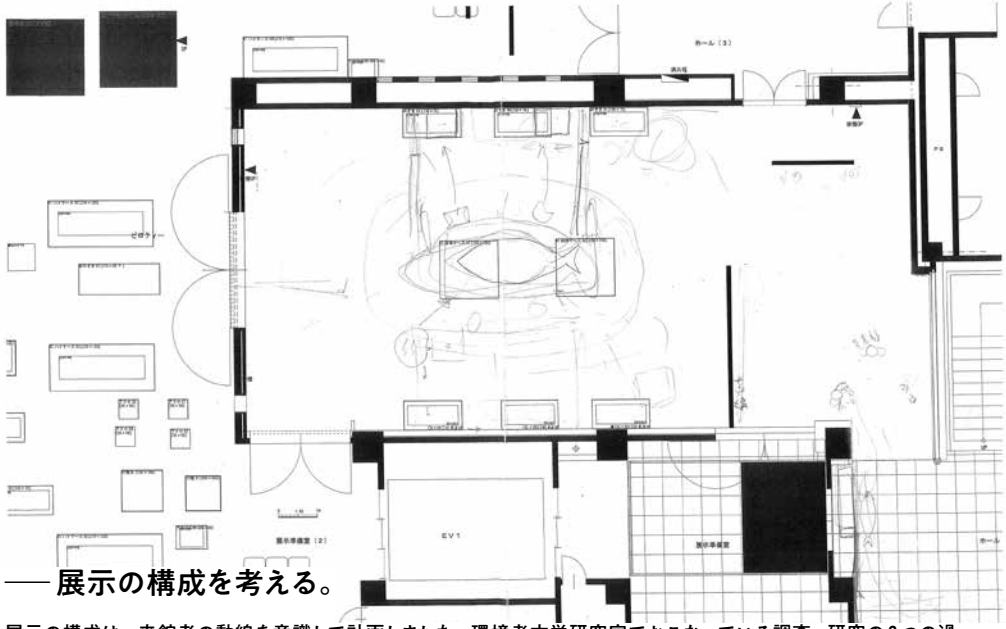
骨に残された情報を読み取り、歴史を解明する手がかりを探す作業について紹介しました。

Process 5　考察する

骨から歴史をどう読み解くのか、その作業について紹介しました。

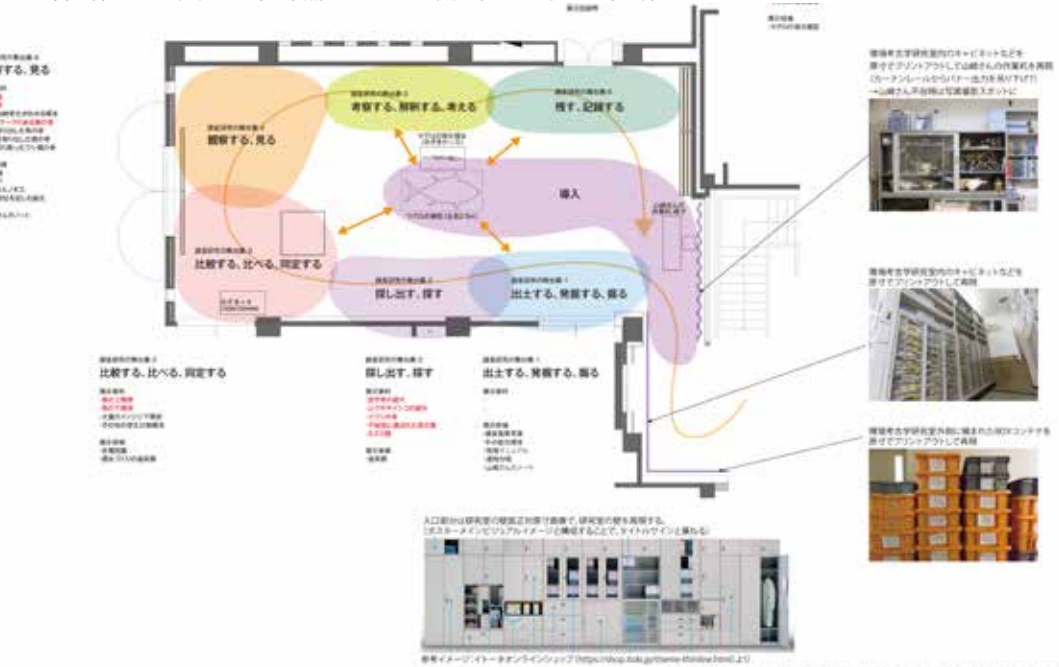
Process 6　記録する

出土した骨の情報や調査研究の成果を記録する作業について紹介しました。

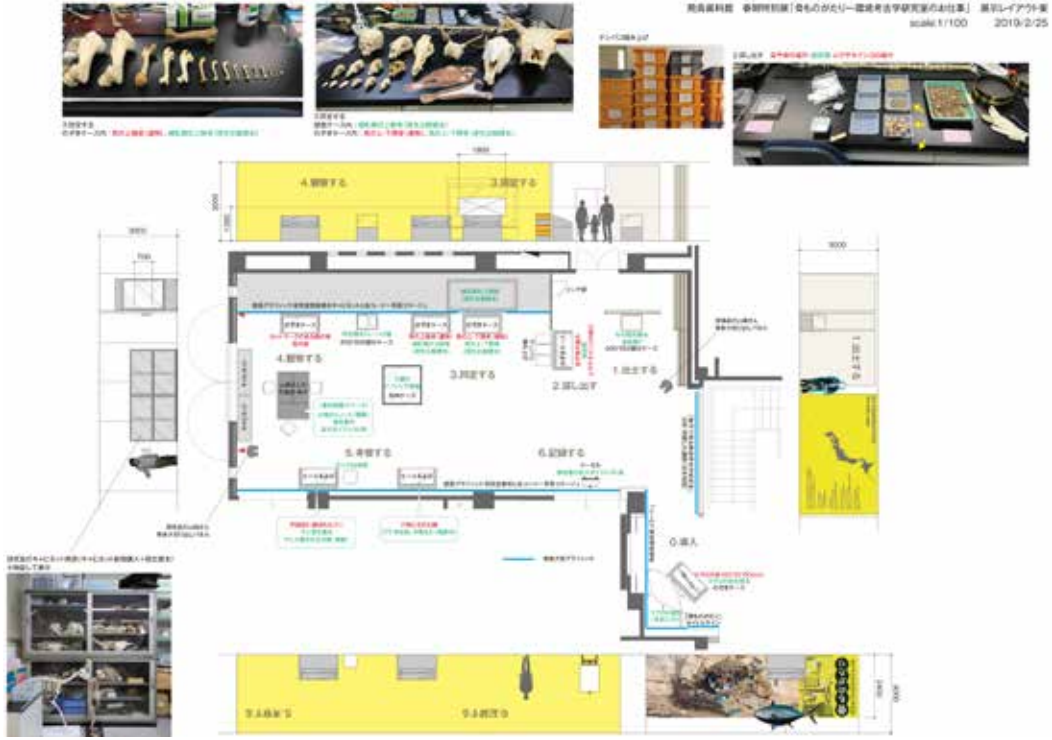


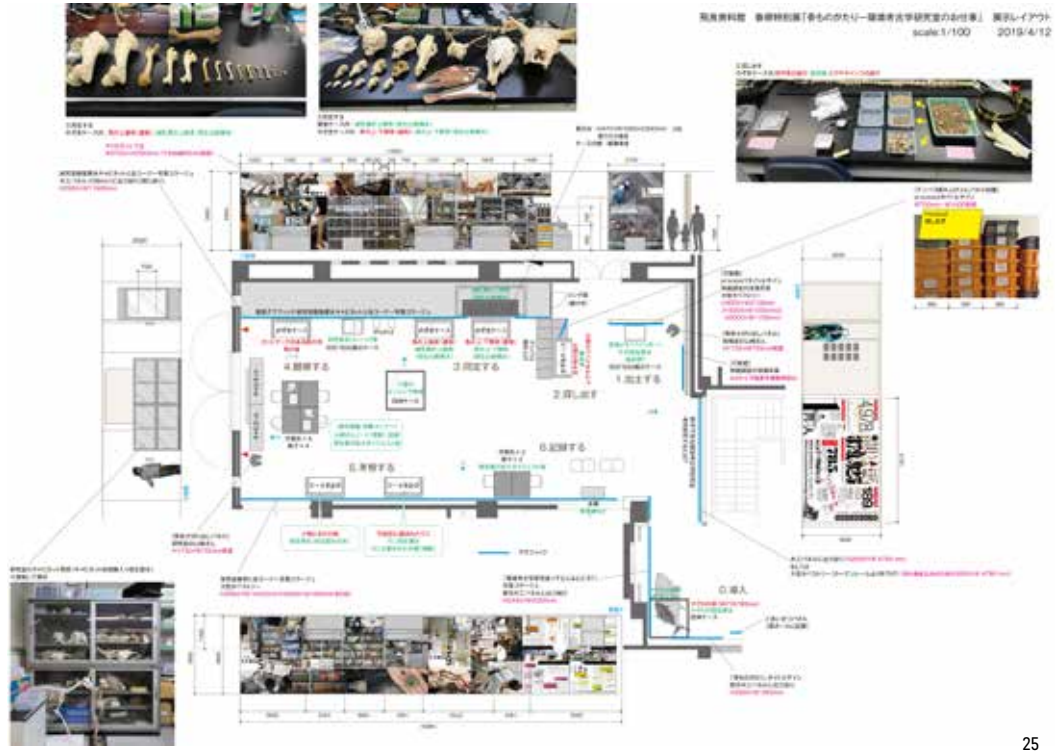
── 展示の構成を考える。

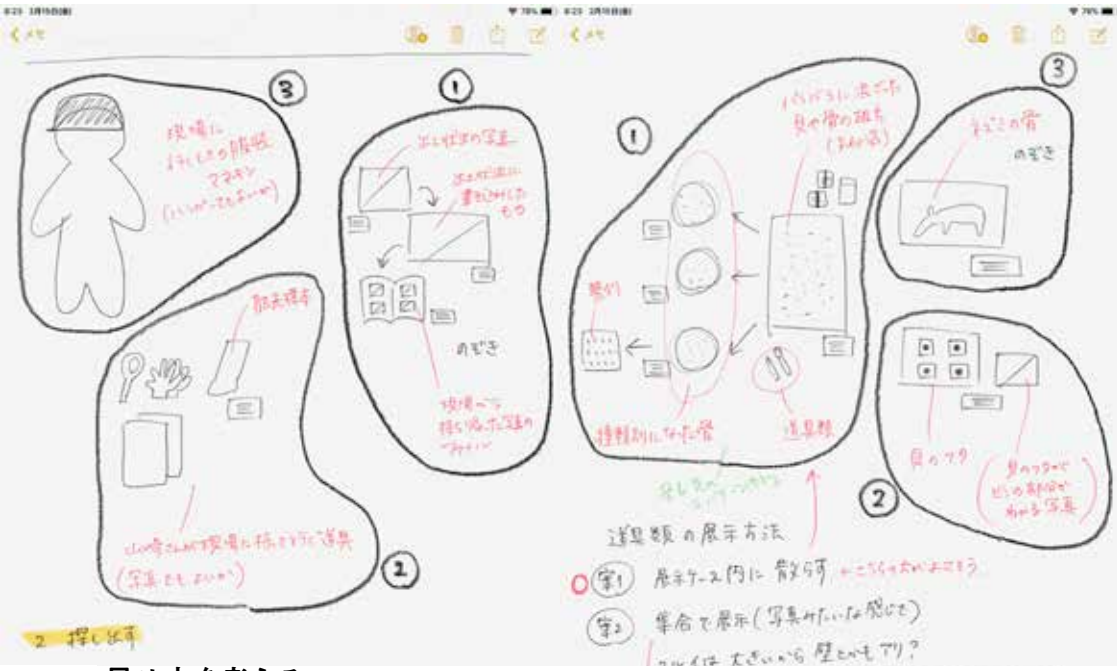
展示の構成は、来館者の動線を意識して計画しました。環境考古学研究室でおこなっている調査・研究の6つの過程をどのように展開したら、最もわかりやすく、かつ印象的に見せられるのか何度も議論を重ねました。
展示構成では「発掘現場での調査」と「研究室内での調査」の違いをわかりやすくするため、「Process 2 探し出す」と「Process 3 同定する」の間を区切るように展示ケースを配置しました。
また、環境考古学研究室の研究成果を示す縄文時代の巨大マグロの模型の見せ方には頭を悩ませました。展示室内に目玉として配置する案も検討しましたが、最終的には展示室の導入部でその迫力を見せることにしました。

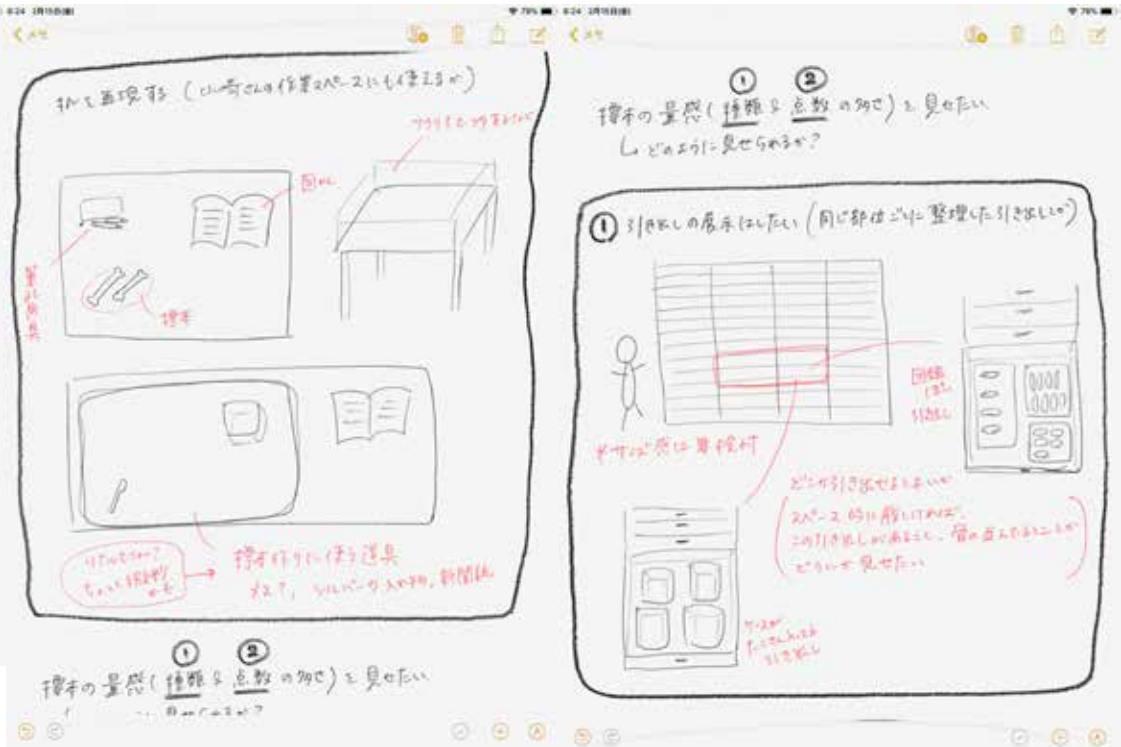


飛鳥資料館　春期特別展「奇ものがたり－環境考古学研究室のお仕事」　展示ゾーニング案　①
scale:1/100
2019/2/14



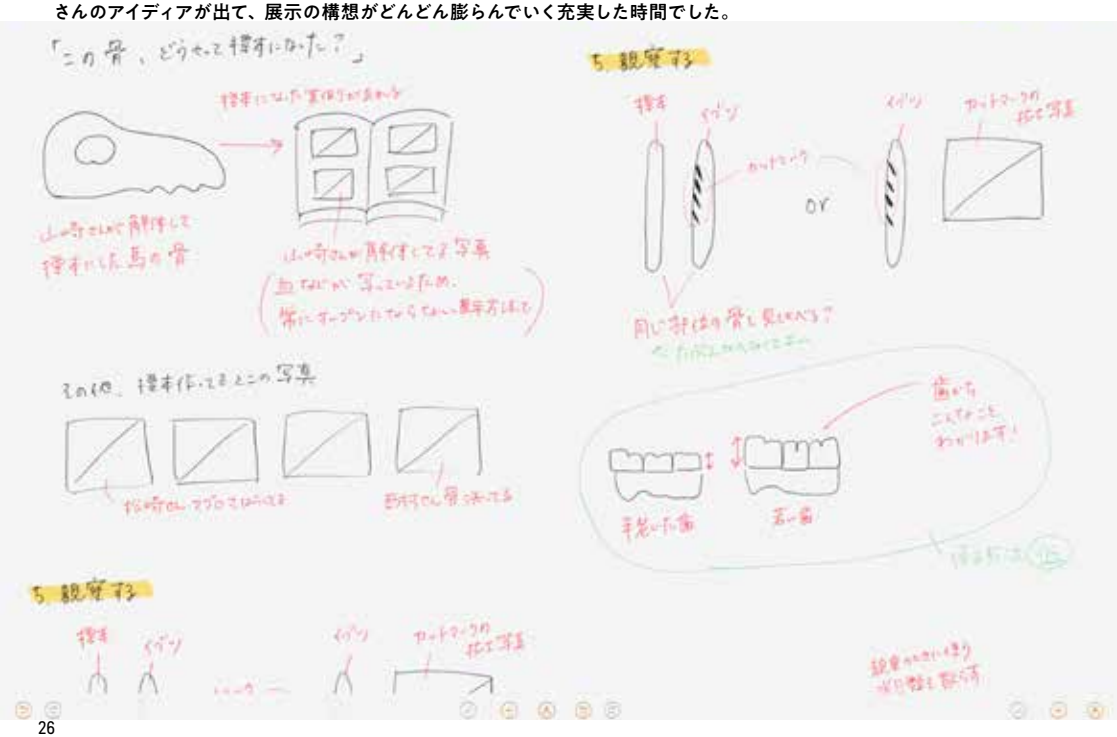


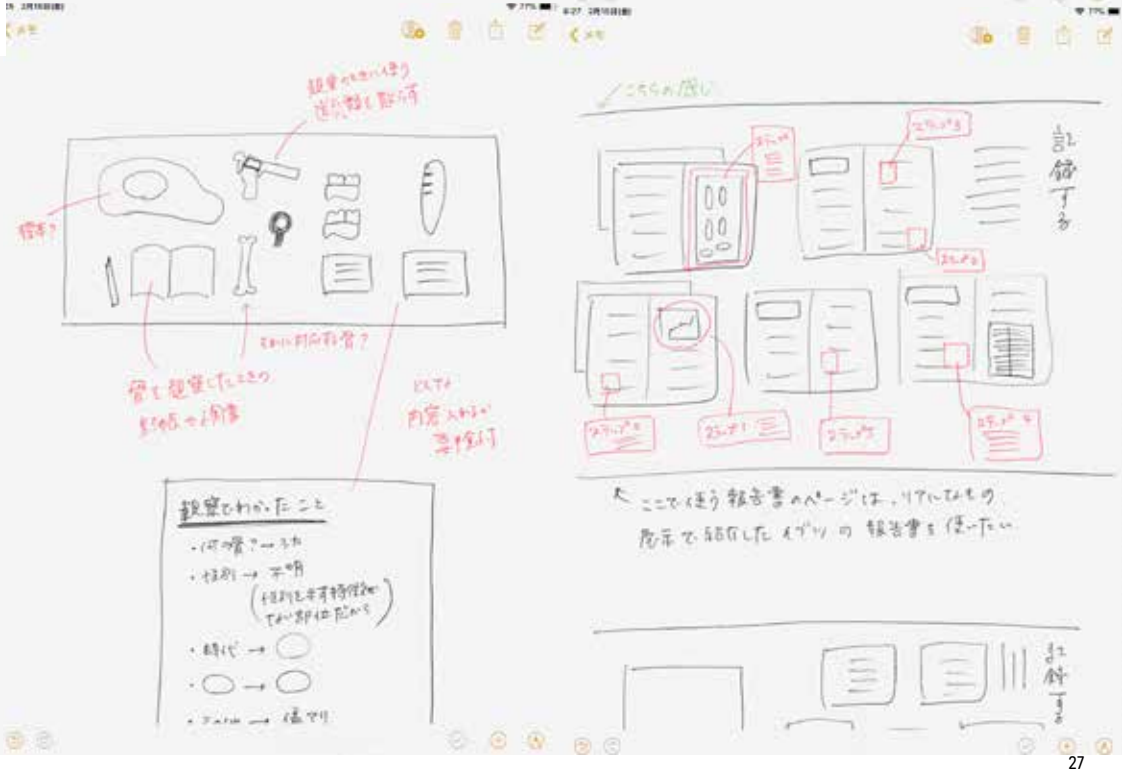


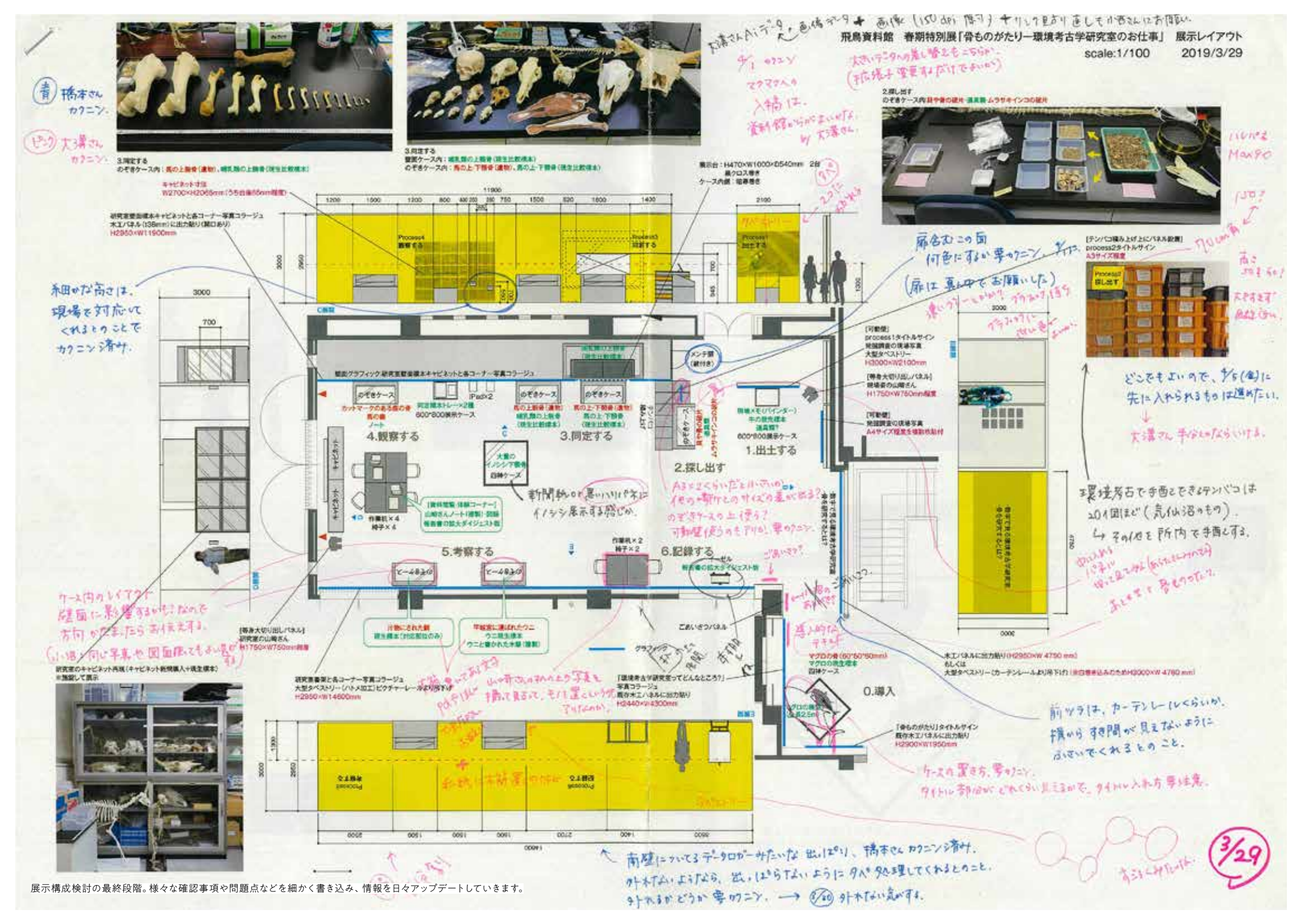


── 見せ方を考える。

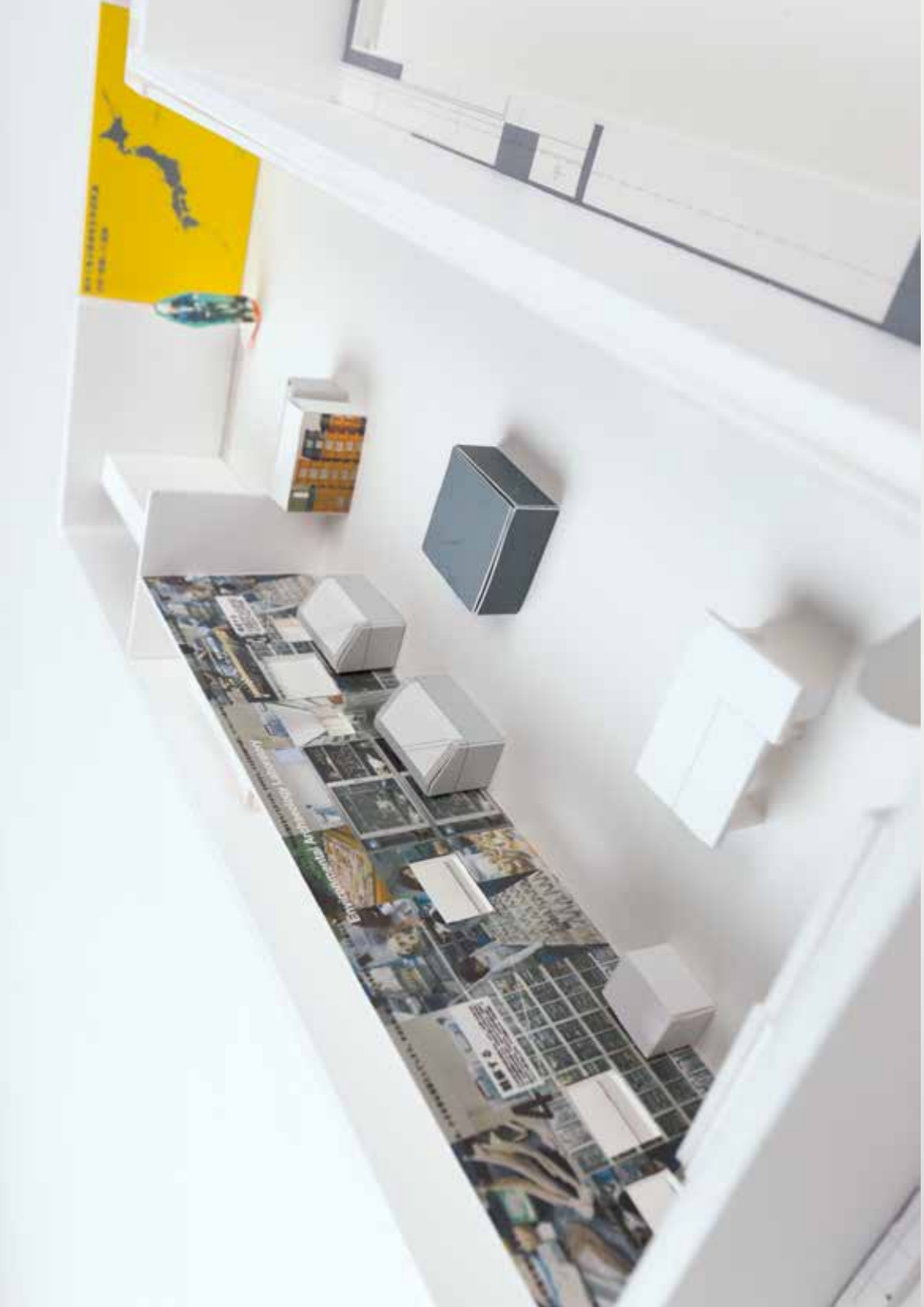
全体の展示構成を計画しながら、資料の並べ方やパネルの配置なども具体的にしていきました。どうしたら魅力的に見えるのか、最小限の説明だけで調査手法や研究成果を視覚的にわかりやすく伝えるにはどうすればよいのか、たくさんのアイディアが出て、展示の構想がどんどん膨らんでいく充実した時間でした。







展示構成検討の最終段階。様々な確認事項や問題点などを細かく書き込み、情報を日々アップデートしていきます。



展示室のレイアウトを検討する段階では、空間デザイナーの小西さんが展示室の50分の1の模型を製作しました。この模型を使い、展示ケースなどの配置や動線をシュミレーションしながら、レイアウトを決めていきました。

研究室の雰囲気をリアルに再現。

環境考古学研究室の魅力を伝えるには、研究室そのものを見てもらうのが一番良いのではないかと考えました。研究室ならではの資料の並べ方や道具の配置を再現することで、ここでしかできない貴重な体験を提供できる展示空間を目指しました。

── 壁面を研究室の写真で埋める。

デザイナーの大溝さんから、研究室を再現するのなら、床から天井までの壁面を写真で埋め尽くして研究室の雰囲気を伝えてはどうかという提案がありました。そこで、研究室の棚や日常の風景を様々な角度から撮影した写真をコラージュして、まるで研究室を訪れたかのような雰囲気の演出を試みました。

当初は、写真をコラージュした木工パネルを展示室の全壁面に立てる案も検討していましたが、予算の都合で断念しました。しかし、空間デザイナーの小西さんの提案で、北壁面と展示室入口近くの壁面のみを木工パネルで造作しました。そして、南壁面や可動壁のグラフィックにはタペストリーを代用することで費用を抑えながら、念願だった床から天井までの全面に迫力あるグラフィックを実現できました。南壁面は、9枚のタペストリーを継いで一面のグラフィックにしましたが、造作担当のカマダ工芸さんたちの丁寧な仕事のおかげで、どこに継ぎ目があるかわからないくらいの仕上がりになり、思っていた以上に空間への没入感を演出することができました。【小沼】

── 事務机やキャビネットも持ち込む。

研究の現場の雰囲気を伝えるため、実際の事務机やキャビネットを置いて研究室のようすを再現したコーナーも作りました。

資料の保管などに使用しているテンバコも展示の小道具として使用しました。実際の研究室では、復興支援事業に関わる宮城県の気仙沼市教育委員会など、全国の地方自治体から分析依頼を受けた資料とともに搬入されたテンバコも保管しています。そこで、気仙沼市教育委員会のご了承をいただき、展示室に一緒に並べました。よりリアルな雰囲気を出すために、テンバコについているラベルもあえて残したままにしました。【小沼】

キャビネットは鍵ができるものを用意し、資料の安全も確保しつつ、イベントに使う資料などの保管場所としても活用しました。事務机は、飛鳥資料館にあった古いものを再利用しました。

ディテールにこだわる。

環境考古学という研究分野は、一般に広く知られていません。また、専門的な研究は難しいという印象を与えがちです。だからこそ、誰にでもわかりやすく、親しめるような見せ方をしたいと細部までこだわりました。

── ウシの足跡を作る。

Process 1

研究室紹介の最初のステップとなる「Process1 出土する」では、ウシをはじめ動物の骨が多数出土した藤原宮跡の発掘調査現場の写真と合わせて、出土状況を記録した現場メモや、現場で使う道具を並べて紹介しました。ひときわ目を引くウシの足先標本は、発掘現場で見つかった足跡がウシのものかを確認するための資料です。

足先標本は、ただ展示するだけではなく、その使い方を伝えることで環境考古学研究室の仕事のイメージを膨らませたいと思いました。そこで、足先標本を型取りをして足跡を見せる展示案を考えました。100円ショップで買ってきた紙粘土に、学芸室スタッフの美濃さんのアイディアで絵具を練り込んで着色し、足形をとりました。【西田】

── 臨場感を出す。

展示ケース内には、作業で使う道具と一緒に骨などの出土資料を並べることで、実際に研究室でおこなっている「探し出す」作業の臨場感と流れを表現しました。また、作業途中の机の上の雰囲気がわかりやすく伝わるように、あえて少し雑多に道具などを配置しました。

ここで並べているのは「ムラサキインコ」という名前の貝で、その個体数を数える作業を再現しました。小沼さんから、この展示ケースでは作業途中の雰囲気を大切にしたいと聞いていたので、それを演出できるように意識しました。作業途中を再現するといえども、何かが並んでいることが一目でわかるように、貝の向きや形に気を配りつつ、普段の作業以上に丁寧な配列を心がけました。広くはない展示ケース内で配列を崩さぬよう並べるのは少々骨が折れましたが、会期中多くの来館者が、このムラサキインコに興味を示してくれている姿が見られて嬉しかったです。【山田】

展示ケース内に並べる資料のシミュレーションとレイアウト案

──壁面と一体化させた展示ケース。

このコーナーでは、展示ケースの前に開口部を設けた壁面パネルを立てて、壁面パネルとケースが一体に見える展示手法を取り入れました。あたかも資料が壁面のキャビネット内に展示されているように見えることを意図しましたが、想像以上に迫力のある展示となり、展示室の見せ場のひとつにできました。

── 量感で見せる。

Process 3

リュウキュウイノシシの下顎骨は、環境考古学研究室が所蔵する標本の中で最も点数が多い標本です。その量感を感じてもらえるように、できるだけ多くの骨を展示ケース内いっぱいに並べました。骨そのものを見せるというよりは、約2,000点におよぶリュウキュウイノシシの下顎骨を整理・資料登録する作業の雰囲気を大切にし、あえて各個体に付いている作業中のラベルもそのまま残して展示しました。

実は、今回の展覧会で展示した出土資料の点数は非常に少ないです。貝塚や洞窟以外の遺跡から出土した骨は、強化処理をしても脆弱な場合があります。文化財の積極的な活用が求められる中で、動植物などの脆弱な資料については、保存と活用の両立を図るために、遺物にこだわらずに工夫して見せるという方向性も有効なのではないかと考えています。【山﨑】

── グラフィックで見せる。

Process 5

「Process 5 考察する」では、「アカデミックな内容をわかりやすく伝えること」と「指先ほどの小さな資料をどう見せるか」というところがポイントでした。そこで、展示ケースに資料の解説パネルを設置し、その上に資料を置くデザインを採用しました。骨を単なるモノとして展示するのではなく、研究過程の流れの中に位置づけて紹介することで、骨から歴史を読み解くおもしろさを伝えたいと考えました。

パネル作成に当たっては、展示室での来館者の進行方向との関係や、研究過程の流れを意識したテキストの配置バランスなどが難しかったですが、空間デザイナーの小西さんと何度も相談をしながら決めていきました。

── より深く理解してもらうために。

「Process 6 記録する」では、Process 1～5の調査・研究を経て明らかになった成果を記録する、発掘調査報告書の執筆に関わる仕事で締めくくりました。報告書は多くの来館者には馴染みのないものですが、その執筆は調査研究の成果を記録して後世に伝えるためにも大切な仕事です。報告書をまとめるうえで、調査研究のProcess 1～5がどのように生きてくるのか、実際に本文を見せながら解説することで、研究室の仕事の集大成を紹介しました。

環境考古学研究室が関わった報告書や論文などが読めるコーナー

通常は本棚に納められている報告書を、展示室という空間でどのように見せたら良いのかについては、空間デザイナーの小西さんも含め、何度も議論を重ねました。普段はあまり読む機会のない報告書を読みたくなる展示を目指し、展示室で紹介している骨が掲載された報告書の本文に、注目してほしいポイントを追記した展示パネルや大判の冊子を用意しました。予想以上に多くの来館者がこのコーナーで足を止め、報告書をじっくり読んでいる姿が見られました。【小沼】

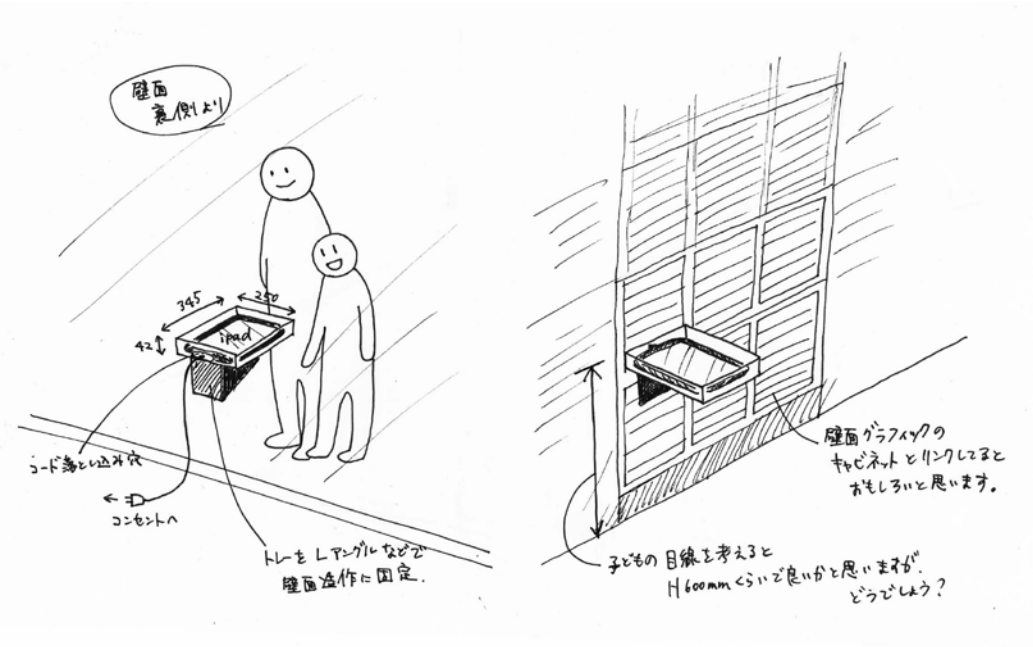
ワクワク感と驚きを。

専門的な研究分野だけに、資料を陳列しただけでは難解な展示になりかねないところを、見た人がワクワクするような驚きや親しみを感じ、興味をかき立てるような様々な工夫と遊び心のある見せ方などを考えました。

── デジタルデバイスを活用する。

Process 3

環境考古学研究室では、書類保管用の引き出しに小さな骨の標本を保管しています。壁一面に広がる引き出しには、研究室ならではのおもしろさがあります。しかし、実物の引き出しは、展覧会期間中も研究室の調査で使用するため、すべてを展示することができませんでした。そこで、iPad を入れた引き出しを壁面に組み込み、骨を収納した引き出しの写真をスライドショーで流しました。



スライドショーに使う標本の引き出しは、特にユニークだと思うものを 40 点ほど選び、スタジオに運び込んで撮影をしました。

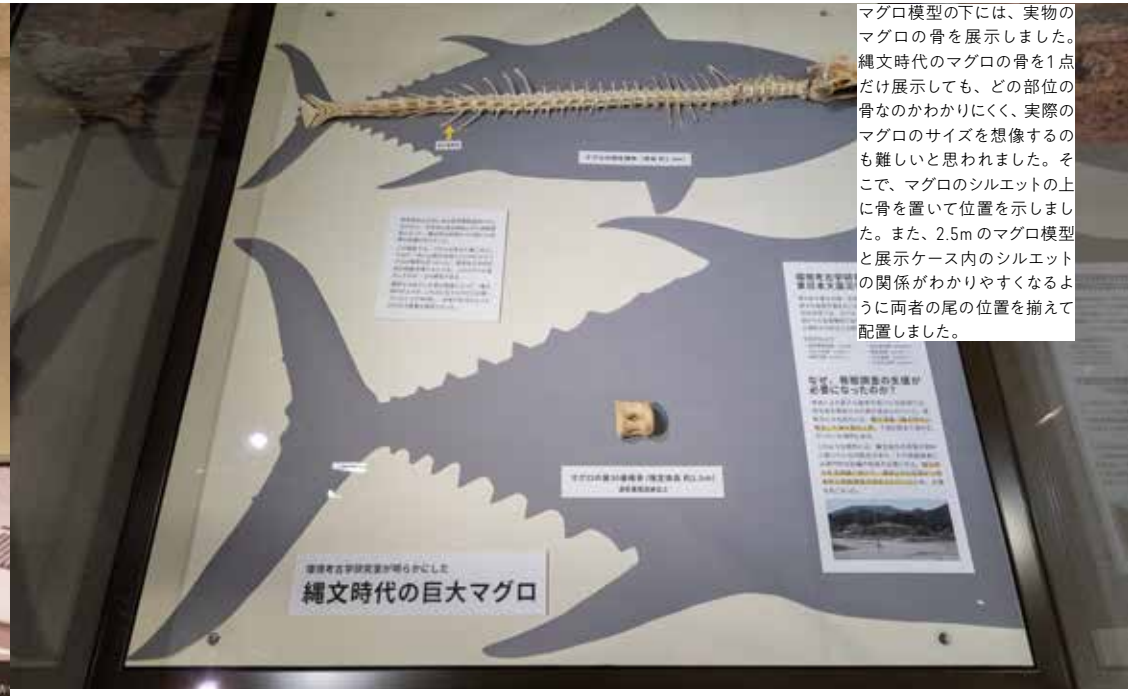
実物の引き出し 2 点を展示している隣で、iPad を組み込んだ引き出しでスライドショーを流すことで、引き出しに収納されている骨そのものはもちろん、その保管方法のおもしろさなどを感じてもらえたらと考えました。引き出しは、子供でも見やすい高さになるように意識しながら決めました。【西田】

──原寸大にこだわった巨大なアイキャッチ。

宮城県気仙沼市の波怒棄館遺跡から出土したマグロの骨は、縄文時代の人々の暮らしを伝えるとともに、縄文時代に生息していたマグロの生態がわかる大変貴重な資料です。この骨から体長2.5mの巨大なマグロの存在を解明する研究のおもしろさと、骨から復元したマグロのサイズ感を多くの人に体感してもらうために、マグロの模型を制作することにしました。

マグロ模型の制作は、協力してくださる業者さんを探すところからスタートしました。限られた予算の中での制作だったため苦労もありましたが、京都にある百寶堂さんに制作をお願いし、無事に迫力あるマグロ模型が完成しました。模型の成形段階では、山崎研究員たちと一緒に百寶堂さんの作業場へ伺い、ヒレの形や顔の表情、そして体の色味など、できる限り実物に基づいた仕上がりになるように、図鑑などの資料を使って職人さんたちと意見を交わしながら制作を進めました。【西田】

展示室の入口に、環境考古学研究室がおこなってきた東日本大震災の復興支援事業を紹介するコーナーを設け、縄文時代のマグロの骨と、その骨から推定復元した2.5m の原寸大のマグロ模型を展示しました。会場では、環境考古学研究室の仕事を6 つのプロセスごとに紹介したため、会場レイアウトを検討する段階では、復興支援事業について紹介するコーナーをどこに入れるか、かなり悩みました。最終的には、アイキャッチなマグロ模型を会場の入口に展示し、関連する復興支援事業の紹介をすることで、導入部としての機能を持たせました。



マグロ模型の下には、実物のマグロの骨を展示しました。縄文時代のマグロの骨を1点だけ展示しても、どの部位の骨なのかわかりにくく、実際のマグロのサイズを想像するのも難しいと思われました。そこで、マグロのシルエットの上に骨を置いて位置を示しました。また、2.5m のマグロ模型と展示ケース内のシルエットの関係がわかりやすくなるように両者の尾の位置を揃えて配置しました。

マグロの骨の展示に先立って、マグロのシルエットのサイズ感や、実際に骨を並べたときの見え方を確認するためのリハーサルをおこないました。事前に確認をしていたため、陳列作業はスムーズに進めることができました。特に背骨の順番に間違いがないよう注意し、来館者が見やすい角度などを微調整しながら陳列していきました。【松崎】

マグロのその後。

骨ものがたり展の後、宮城県の東北歴史博物館で開催される令和2年度の春季特別展「みやぎの復興と発掘調査」で、マグロ模型が展示されることが決定し、東北歴史博物館へ貸し出すことになりました。

展示した縄文時代のマグロの骨は、復興事業に伴う発掘調査で出土した資料なので、制作を検討し始めたときから少しでも復興支援につなげることができればと思っていました。東北地方の方々が、出土した骨とともに推定復元した模型を見て、「縄文時代の東北地方にいた人々がこんなに大きなマグロを獲っていたんだ」と実感していただけると嬉しいです。【山崎】

――答えは引き出しの中。

展示室のハンズオンコーナーは、興味を持った人が気軽に体験しやすいように、ワークシート形式ではなく、その場で完結するクイズ形式にし、答えは引き出しの中に忍ばせました。
地場産業である貝ボタンの歴史もあわせて伝えたいと考え、クイズの題材には、地元の方から譲り受けた貝ボタン製作時に出た貝の破片をハンズオンに活用しました。環境考古学的な目線を持つことで、飛鳥地域の産業の歴史の幅広さを見せたいという狙いもありました。来館者からは、「海のない奈良で貝ボタンをつくっていたとは！」という驚きの声や、昔の思い出を懐かしむ声などが寄せられました。

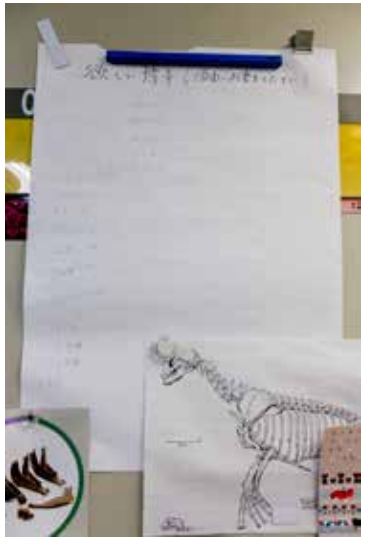
会場に設置した事務机の引き出しには、研究室スタッフの裏話をプリントしたパネルを見られるようにしました。引き出しをのぞいたらクスッと笑えるような内輪話や、働いている人のリアルなようすを見せることで、研究室を身近に感じてもらえたら良いなと期待を込めて、この仕掛けにしました。

――小さな発見のある仕掛け。

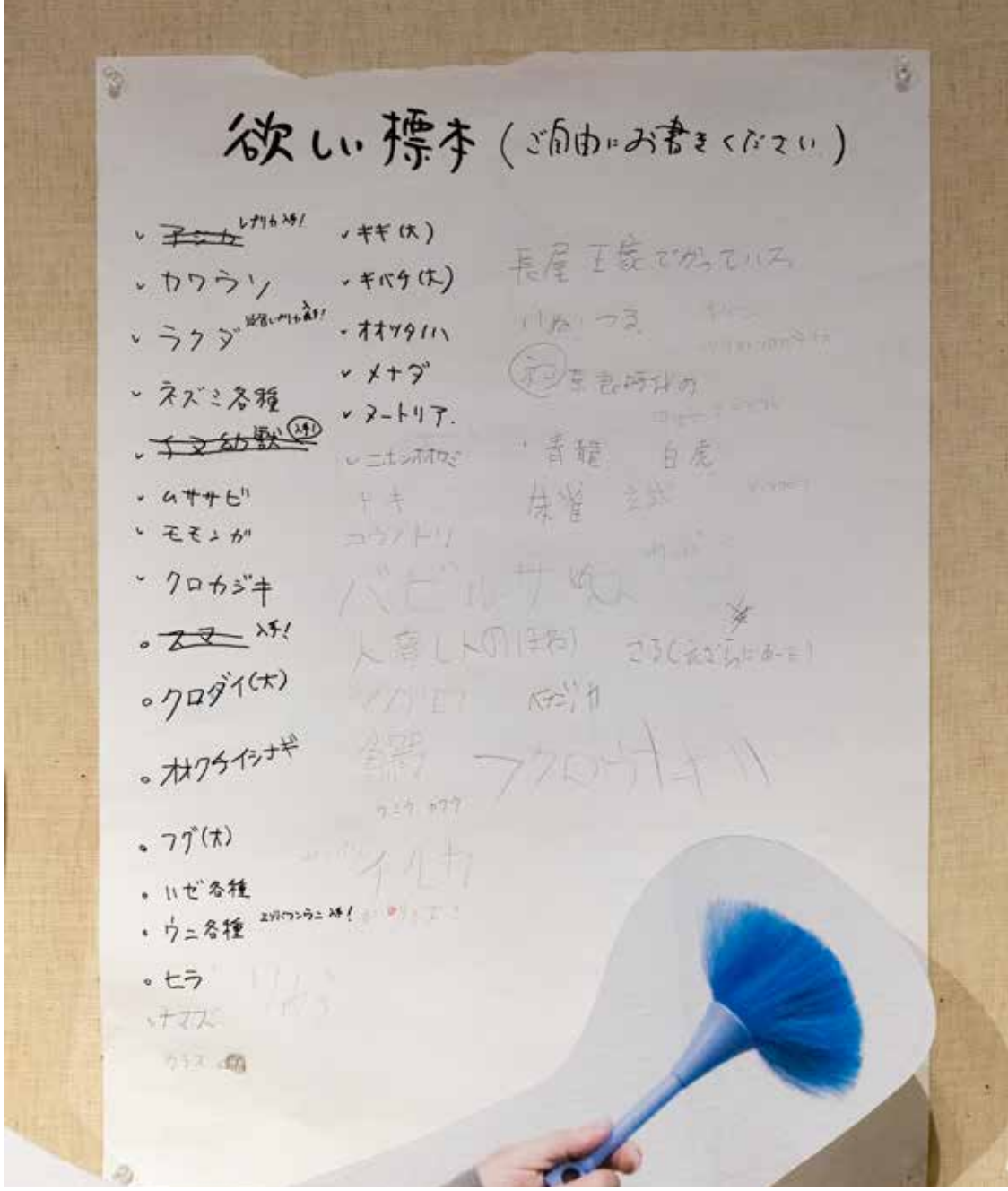
調査研究の内容とは直接関係ありませんが、来館者に研究室をよりリアルに体感してもらうため、実際の研究室に掲示してあるチラシなどを使って再現を試みました。展示室の隅々まで、小さな発見を楽しんでもらえたらという思いの、ちょっとした遊び心でもありました。

環境考古学研究室で働いている人が予定を書き込むカレンダーも再現しました。4 ～ 6 月の会期中は、山崎研究員を中心とする研究室の実際の予定を書き込んで更新しました。「よく見たら予定が書いてある！」「この資料は何だろう？」というように小さな発見を楽しんでもらいたいという狙いもあったので、あえて題箋などは付けませんでしたが、来館者アンケートでは、このカレンダーに注目したコメントも多かったです。

研究室の雰囲気をさらに演出するために、普段は展示室には置いていない時計も設置しました。時計の設置は雰囲気づくりが目的でしたが、イベント時のタイムマネジメントや、遠足で来館した子供たちの集合時間の確認などにも使えて便利でした。【小沼】



研究室に貼られた「欲しい標本リスト」の実物

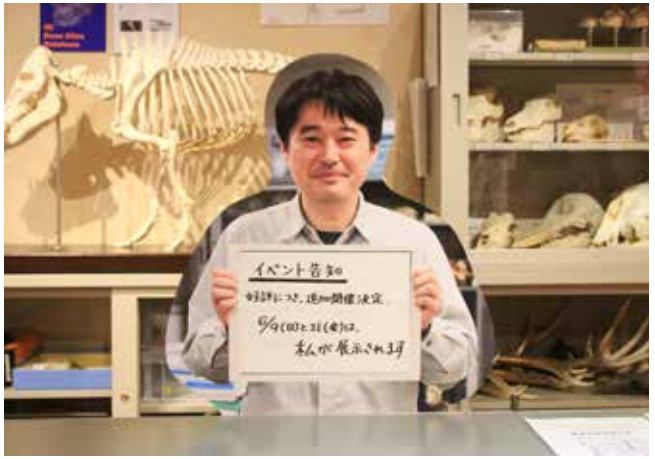


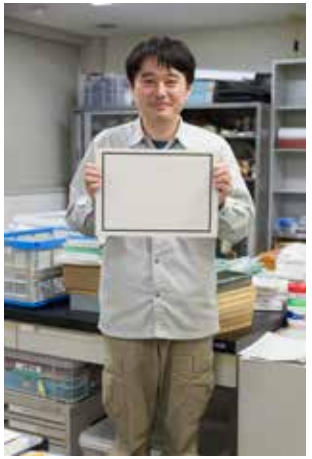
【来館者が繋げた「欲しい標本」の輪】

環境考古学研究室の壁には、研究室のスタッフや調査に来た外部の専門家が、研究に必要な標本を自由に書き込める「欲しい標本リスト」が貼ってあります。研究室らしさが出ていておもしろいと思ったので、会場にも「欲しい標本リスト」をそのまま展示しました。本来は“研究室に来た専門家が欲しい標本”を書き込むためのものだったのですが、リストに「ご自由にお書きください」と書かれていたこともあり、会期中に“来館者が欲しいと思った標本”がどんどん追加されていきました。安全面の上でも問題なかったので、自由な書き込みが増えていくのをそのままにしていたところ、「欲しい標本リスト」のところで足を止めて見ている人が多くなり、元からの書き込みだけでなく、他の来館者の書き込みが次の来館者の興味を引いているようでした。こちらが意図しなかった部分で、展示を通して来館者同士がつながるようすからは、展示の可能性を感じました。　※鉛筆での書き込みが、来館者によるもの。

──研究員を主役に。

今回の展示では、研究員自身が重要な存在でもありました。実際に「研究員を展示する」という発想で、展示室には山崎研究員たちの机を用意しました。この席にはイベント「研究員を展示！」当日に山崎研究員たちが座るだけでなく、それ以外の日にも等身大のパネルを設置し、イベントを告知するボードとしても活用しました。



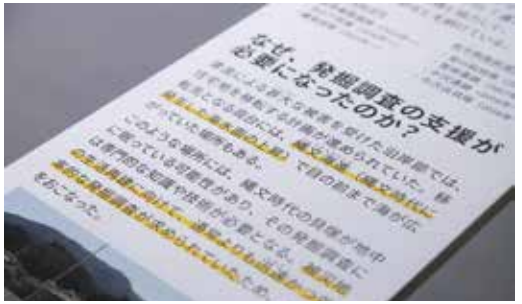


──展示室までの誘導。

特別展示室が地下にあるため、以前から「展覧会の会場がわかりにくい」という声が寄せられることがありました。改善策を検討した結果、入口から特別展示室への順路を示すサインを床に貼り、階段の踊り場の壁面には巨大なパネルを掲示することにしました。その結果、展覧会会場までの動線をわかりやすく整理することができました。

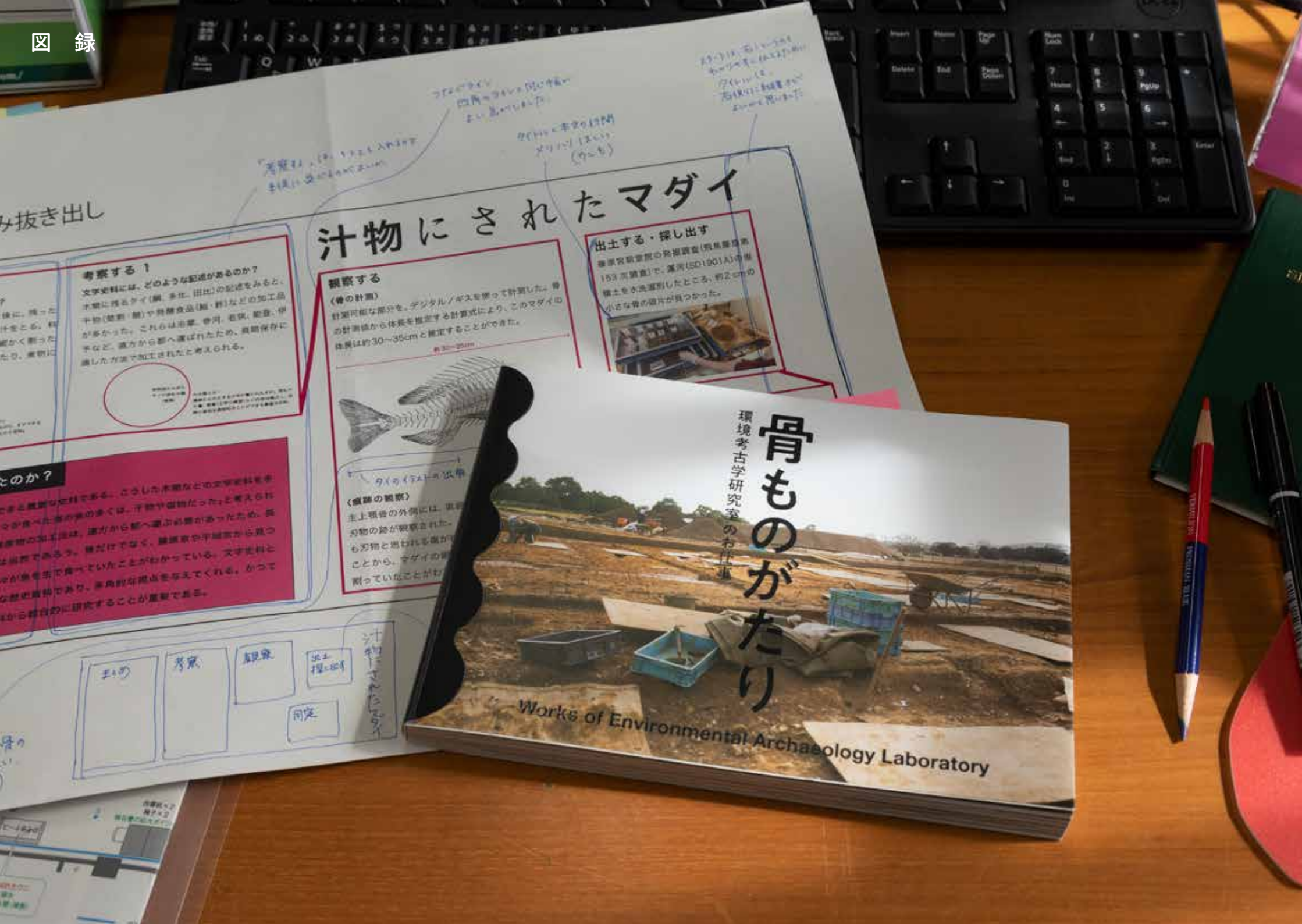
──題箋やキャプションパネルの制作。

壁面の大型パネルは造作業者へ外注することが多いのですが、ケース内に入れる解説題箋やキャプションは、基本的に学芸室のスタッフが自前で制作しています。これらのデザインは、展覧会ごとにコンセプトに合わせて変えており、骨ものがたり展では、奈良文化財研究所の研究員もよく使っている野帳の方眼紙や、資料保管用のラベルなどをイメージして作成しました。



解説テキストは、情報や文章量を検討しながら文章を練っていきます。誤字・脱字はもちろん、内容に誤りがないかなど最後まで細かく確認します。

Process 4 観察する
がかりを探す
Environmental Archaeology Laboratory
4978
379,925
78.5


み抜き出し
汁物にされたマダイ
考察する 1
文字史料には、どのような記述があるのか？
観察する
〈骨の計測〉
出土する・探し出す
骨ものがたり
環境考古学研究室のお仕事
Works of Environmental Archaeology Laboratory

見てわかる、見て感じる図録を作る。

骨ものがたり展では、歴史や文化財について詳しく知らない人へも「わかりやすく伝える」という手法に徹底的にこだわって展覧会作りを進めました 。図録では、環境考古学研究室の仕事を言葉で説明するのではなく、読んだ人が「ぱっと見て、感じ、理解する」というわかりやすさを大切にし、写真や図面などのグラフィックを中心に「パラパラ見るだけでも楽しい、写真集のような図録」を目指しました。ただの展示の追体験や記録だけにとどまらず、図録ならではの情報の伝え方を模索しながら制作を進めました。

── すべての始まりは発掘調査から。

一見、骨の分析と発掘調査現場はあまり関係ないように見えますが、環境考古学研究室の調査研究で扱う骨はすべて発掘調査で出土したものなのです。そこで、「環境考古学研究室の調査研究の始まりは発掘調査であること」を感じてもらえたらと考え、表紙に発掘調査の写真を使いました。

【カバー写真について】

図録のカバーに使ったのは、2017年の平城宮東院地区の発掘調査の作業風景と、環境考古学研究室の外で標本制作に使う鍋などを干している風景を撮影した写真です。この2枚の写真は、現場の「素」の部分が出ていて、私自身も一緒に撮影をした飯田さんもとても好きな写真でした。研究室と発掘調査現場の関係性も表紙で表現できる気がして、良いなと思えました。【小沼】

カバーには、「写真を使う案」と「シンプルな骨のシルエットを入れる案」の2案を考えました。しかし、カバーにも写真を使うことで「何か物語が始まりそうな気配」や「ドラマチックな雰囲気」があるのではないかと考え、写真で進めたいと思っていました。
表紙の発掘現場の写真は「ものがたり」の始まりとしてふさわしいと感じ、ならば最後の裏表紙はと考えた時、この研究所の裏口（勝手な思い込み）の写真には、今日も一日の研究や作業を終えた研究員の姿（人の気配）が感じられ、最初と最後が一本の線で繋がったようにぴったりな気がしました。【大溝】

【判型について】

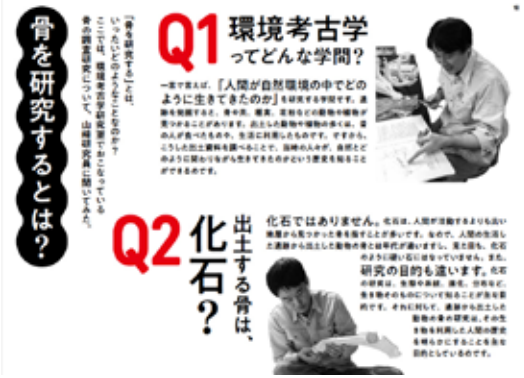
初めて研究所を訪れたとき、研究員の必需品、誰もが大事に愛用している「野帳」と呼ばれるメモノートの存在を知り、この図録も「野帳」のように、いつでもパラパラ開いて見ながら、愛読してもらえるようなカジュアルでコンパクトなものが良いなと思いました。ただ、写真を中心にした構成でと考えると、あまり小さすぎるのも効果的ではないのでA5サイズに決めました。また、既に撮影された写真などを見ながら、横位置にすることで写真もワイドかつ、よりダイナミックに見せることができることからA5横位置にしました。【大溝】

多くの人が興味を持ち、
理解しやすいかたちに変換する。

調査研究の内容や成果などの学術的な情報は、どうしても専門的で難しい内容になってしまいがちなため、
一般の人にも興味を持てるようなかたちで伝えること、
詳細な研究内容などは情報を整理して、理解しやすくすることを意識しました。

── 数字で研究室の概要を伝える。

環境考古学研究室での調査研究について紹介する前に、環境考古学研究室とは一体どんな場所なのかを伝える必要がありました。文章で淡々と紹介するのではなく、研究室についてのイメージが膨らむような伝え方はないか検討した結果、研究室にまつわる印象的な「数字」と、誰もが気になりそうな「素朴な疑問」に研究員が答えるかたちで紹介することにしました。



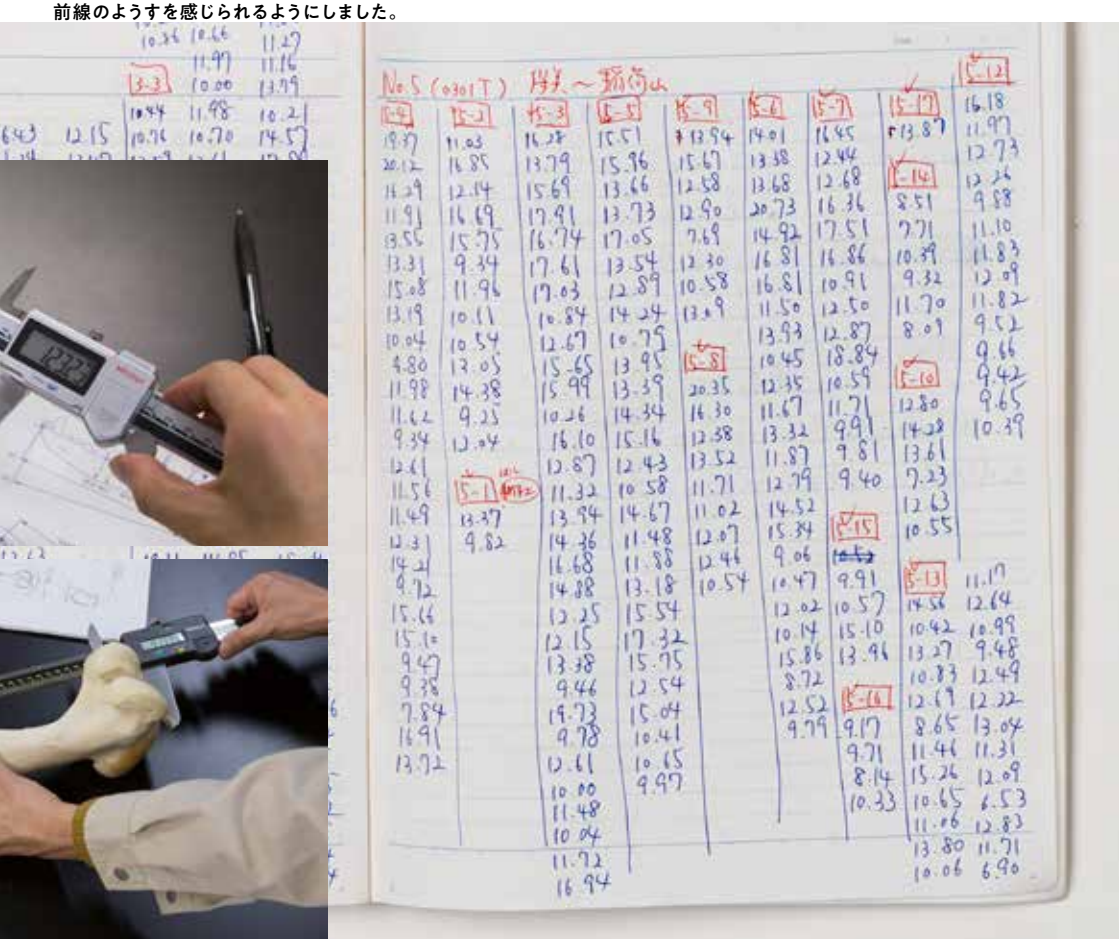
── 調査研究過程を一本の線で導く。

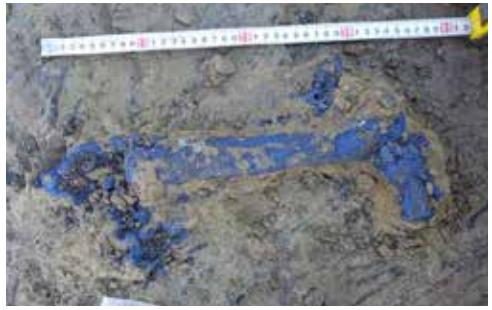
環境考古学研究室でおこなっている調査研究の重要なポイントを6つに整理し、研究成果に至るまでの過程を紹介しました。 これは展示構成と同様の流れになっています。各過程は「キーワード」→「作業・研究の具体的な内容」→「詳細な説明」というように、ページをめくるごとに深い内容へ一本の線で導いていくようなイメージで、誰にでも理解しやすい構成を意識しました。

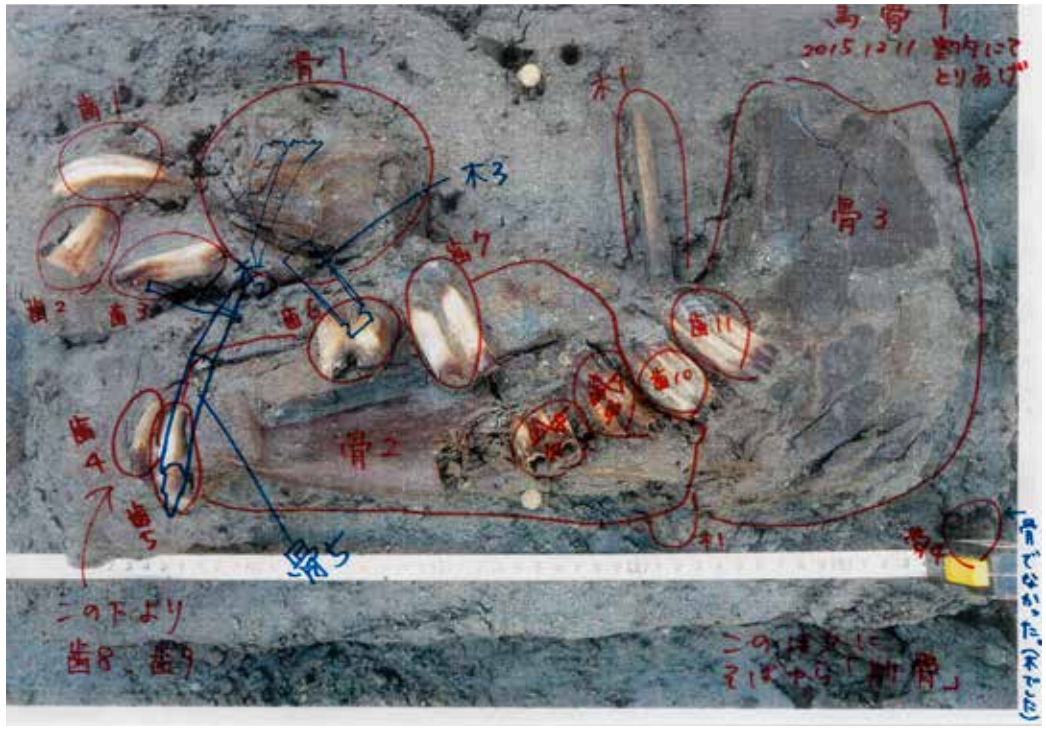
遺跡から出土した骨について、1本の線をたどるように歴史を解明していくイメージから、ページを横断するように1本の直線を入れました。【大溝】

── 現場の臨場感を届ける。

研究員の手書き資料や調査道具は、多くの人にとって普段はあまり目にする機会がないものです。骨ものがたり展では、研究員が発掘調査現場で書いたメモや使っている道具を、できるだけ多く公開することで、研究の臨場感や最前線のようすを感じられるようにしました。







── 等身大の研究員の姿を知ってもらう。

研究員の日常のリアルなスケジュールを見せることで、研究への興味も増すのではないかと考えました。1日のスケジュールだけだと、その日によっておこなう作業や仕事内容が大きく異なるため、1ヶ月のスケジュールを掲載しました。また、研究員を身近に感じてもらいたいという狙いから、あえてプライベートな予定も入れました。

研究員の1ヶ月 Monthly Schedule

環境考古学研究室の研究員は、普段どのような業務をおこない、どんな日々を過ごしているのか？ここでは、山崎研究員のある1ヶ月のスケジュールを見ながら、研究員の日常に迫ってみたい。

1 mon
- 埋文センター会議
- 室長会議

2 tue
- 研修の準備
- 講義の準備
- 研修資料の印刷

3 wed
◇研修「低湿地遺跡調査課程」
- 開校式→山崎「調査概説Ⅰ」→西田さん「調査事例」

4 thu
◇研修「低湿地遺跡調査課程」
- 山崎「調査概説Ⅱ」→井上さん・佐々木さん「調査事例」
- 講師のお弁当確認
- 配布資料の確認
- 研修風景撮影（飯田さん、小沼さん）
- 夜：経験交流会

研修では、自分が担当する講義以外にも、研修全体の司会進行を務めたり、研修生のフォローをおこなったりしています。研修期間は、基本的には研修以外の仕事はせず、研修に専念しています。

5 fri
◇研修「低湿地遺跡調査課程」
- 浦さん「木質遺物」→閉校式
- 午後：研修の片づけ
- 18時10分：歯医者

6 sat

7 sun
- ポニーの撮影（うだ・アニマルパーク）

翌月のウマに関する講演用に、子供を連れてポニーの撮影に行きましたが、いい写真は撮れませんでした。

8 mon
- 図録原稿の修正
- 展示図録の原稿締切

大学院との連携教育も業務のひとつです。この月末、院生2名が研究成果を発表することになっていたので、空いた時間に1時間程度、指導をしました。

9 tue
- イノシシ標本の整理相談
- 研究室の粗大ゴミを出すこと
- 19時までに：学童保育迎え

10 wed
- 10時：標本調査対応
- 11時30分：展示・講演の打ち合わせ（松阪市文化財センター）
- 19時までに：学童保育迎え

11 thu

12 fri
- 午前：発掘現場（藤原198次）
- 午後：分析資料の受け取り（藤原考古第1）
- 11時：標本調査対応→現場対応で、松崎君にお願い
- 依頼原稿の初校返却締切
- 17時40分：歯医者

13 sat
- 論文執筆

14 sun
- 午前：論文の執筆
- 研究発表の題目・要旨締切（貝塚研）

土日は1人のまとまった時間が取れるので、個人研究をしていることが多いです。

15 mon
- 院生の発表内容チェック（山田君）
- 書籍初校ゲラの受け取り
- 講演の題目締切（東京医療保健大学）

16 tue
- 出張：研究打ち合わせ（金沢大学）

17 wed
- 出張：研究打ち合わせ（金沢大学）
- 夜：埋文センター飲み会

18 thu
- 出張：ウニ標本の調査（大阪市立自然史博物館）
- 19時までに：学童保育迎え

研究室に必要な標本が無い場合は、自然史系博物館や大学に所蔵されている標本の調査へ行くことがあります。

19 fri
- 院生の発表内容チェック（松崎君・山田君）
- 論文査読

20 sat
- 書籍原稿の校正

子供と映画へ行くのは、父親の役割になっています（笑）。

21 sun
- 書籍原稿の校正
- 展示図録の校正原稿提出

22 mon
- 10時：消防訓練
- 分析資料の受け取り（平城考古第1）
- 院生の研究発表練習（山田君）
- 展示関連の相談対応

23 tue
- 10時：出土骨の相談対応
- 11時：寄贈標本の受け取り
- 14時：京都大学修士論文中間発表会
- 19時までに：学童保育迎え

24 wed
- 出張：科研実験打ち合わせ（東京医療保健大学）

古代史や栄養学、衛生学などの先生方と、古代食の復元に関する共同研究をしています。

25 thu
- 夜：院生の研究発表練習（松崎君）

26 fri
- 夜：院生の研究発表練習（松崎君）
- 19時までに：学童保育迎え

27 sat
- 午前：映画プリキュア
- 午後：正倉院文書研究会
- 夜：貝塚研300回記念懇親会

この月のように、研修や原稿の執筆が重なったときには、空いた時間で出土資料の分析をしています。分析や報告書の締切は年末や年度末になることが多いので、その頃になると分析・報告書執筆中心のスケジュールになります。

28 sun
- 午後：講演準備

29 mon
- 9時30分：分析打ち合わせ（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
- レプリカ製作の打ち合わせ
- 埋文センター会議の案内出す

入手困難な標本は、レプリカを製作することもあります。

30 tue
- 飛鳥資料館の展示打ち合わせ
- 埋文ニュースの原稿案作成
- 研究打ち合わせ資料の作成

31 wed
- 出張：研究打ち合わせ（東京大学）

※スケジュールに出てくる人の名前は、奈良文化財研究所のスタッフや研修の講師です。

── 働いているからこそわかること。

研究員やスタッフの声からは、日々の調査や作業に携わっている人だからこそわかる研究のおもしろさや苦労が感じられます。調査研究の本筋ではありませんが、その舞台裏のようすを伝えるため、研究室で働いている人ならではの裏話を掲載しました。

仕事柄、生きている動物よりも、標本にするための動物の死体や標本となった骨の方が身近です。骨格標本でしか見たことのない魚を水族館で見ると、「こんな動き方で泳ぐんだ」とじっくり見てしまいます。【山崎研究員】

もう慣れましたが、環境考古学研究室の匂い（＝標本の匂い）は、特に湿気の高い日には強くなることがあります。【研究室スタッフ】

研究のため、個人的にも標本を作ることがあります。魚の標本が欲しい場合には、煮魚がおすすめです。焼き魚だと、骨が焦げてきれいに標本にできないことがあるのですが、煮魚だと身も骨から取りやすいので、きれいな標本が作れます。【松崎アソシエイトフェロー】

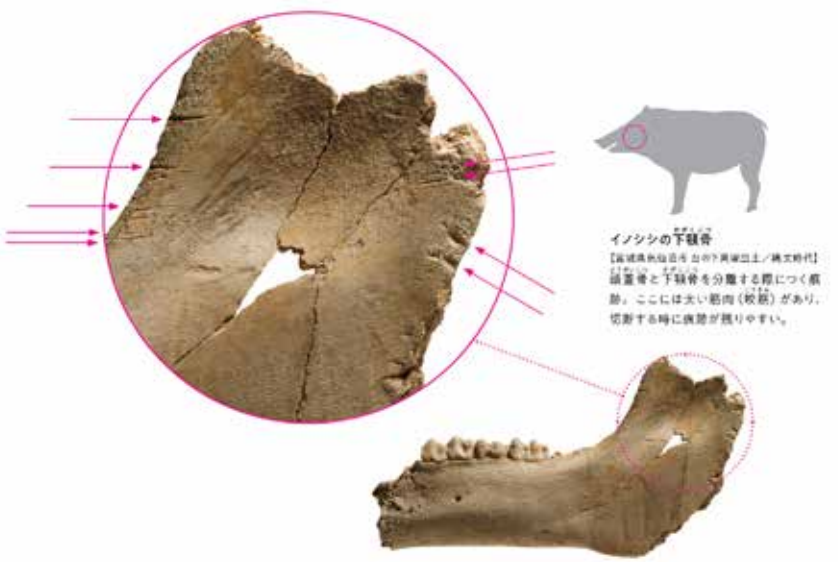
標本として欲しい魚などは、スーパーマーケットで手に入れることもあります。欲しい種類の魚がいつ店頭に並ぶかわからないので、日々のチェックを欠かさないようにしています。【研究室スタッフ】

小さな貝の破片や骨などを数える作業は、1日中ずっと続くこともあります。そうすると、夜寝るときに貝や骨の残像が見えることがよくあります。【研究室スタッフ】

── グラフィックでわかりやすく。

研究室の業務や調査成果などの専門的な情報をわかりやすく伝えるために、適切な写真や図面を補うように心がけ、歴史や文化財の研究についてあまり知識のない人でも理解しやすい構成にしました。

ムラサキインコは一般にはあまり知名度が高くないため、現生標本の写真も一緒に掲載しました。



掲載している骨が何の動物のどこの部分なのか、また傷はどこにあるのかをわかりやすくするため、動物のシルエットや矢印で図示しました。全体写真と部分拡大写真をつけることで、注目するポイントを際立たせるなどの工夫もしました。

骨の同定作業

組写真で見せる

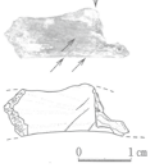
作業過程の手元や資料の細部を撮影した写真は、1枚で調査研究のすべてを伝えることは難しいため、複数の写真を組み合わせて解説を入れることで、研究の詳細や作業している人の見ている風景が伝わるようにしました。

標本の整理作業

── 研究員の頭の中をのぞく。

「Process5 考察する」では、骨の調査成果を文献などと照らし合わせて歴史を読み解くときに、研究員が何をどのようなステップで考えているのかを研究過程に沿って紹介しました。
出土資料の観察から見えたことや、明らかになった歴史像などアカデミックな内容についてわかりやすく伝えるため、マダイの骨は体のどの部分のものなのか、傷はどのようについているのかを図示したり、作業のイメージが掴めるように、できる限り関連する写真で情報を補いました。

『文化財論叢Ⅳ―奈良文化財研究所
創立60周年記念論文集―』
（研究員など専門家向けの資料）



が3ヶ所観察された（図6）。この主上顎骨とは、魚類の上顎の後方に位置する骨である。右側の主上顎骨の外側に切断痕や解体痕が残されているため、真鯛の右側を上にして置き、頭部を何度か割ろうとして包丁をあてた後に、包丁の向きを変えて頭部を割ったという解体方法が復元できる（図7、8）。以上の検討から、体長30～35cmの真鯛の頭部を細かく割って出汁をとったものと考えられ、汁物（羹）などの料理に用いられたものと想定できる。

図7　解体痕跡の位置と方向

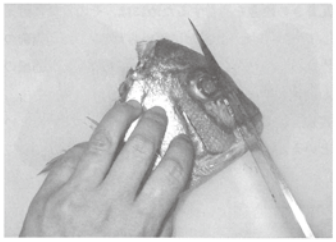


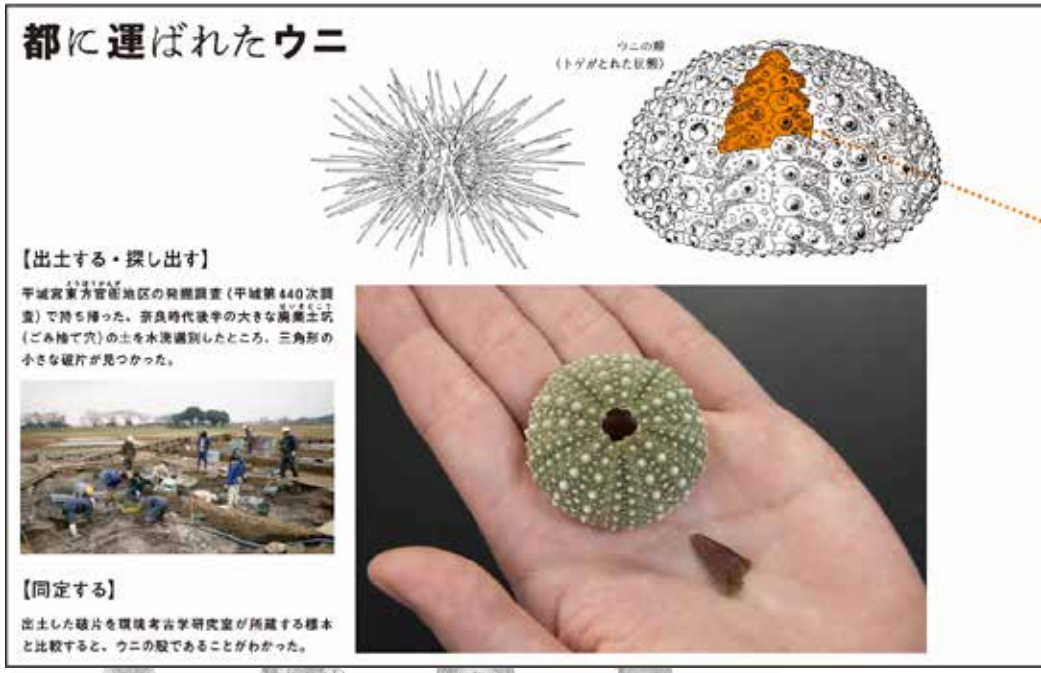
図8　真鯛頭部の切断（復元）

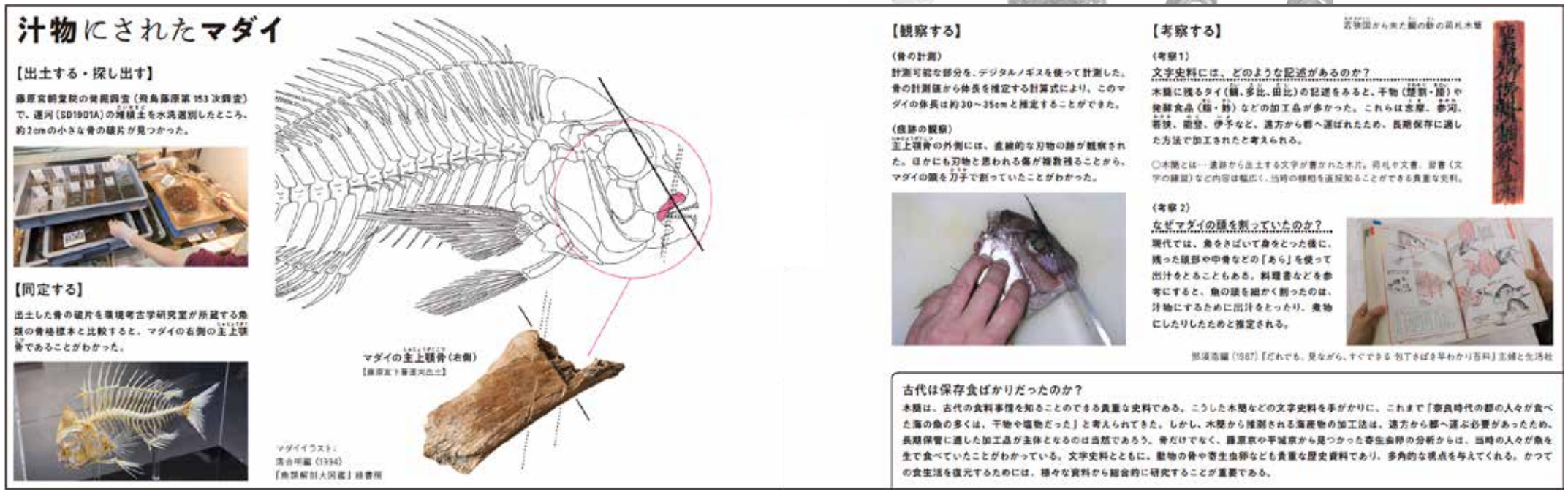
木簡に記された調理・加工法　出土する木簡には、魚の具体的な調理方法が残される場合があり、史料の少ない古代において食生活の実態を示す貴重な資料となっている。そこで、出土した鯛や鮫の調理・加工法に関して木簡の記述内容を検討してみたい[16]（表1）。

「鯛（多比、田比）」に関する調理・加工法が記された木簡は46点で、「腊」、「鮓」、「鮨」、「春鮓」、「楚割」、「醤」、「干鯛」、「煮」の表記が認められた。最も多く見られた表記は「腊」で、46点のう

図録（専門的な情報を多くの人が理解しやすいように整理したもの）

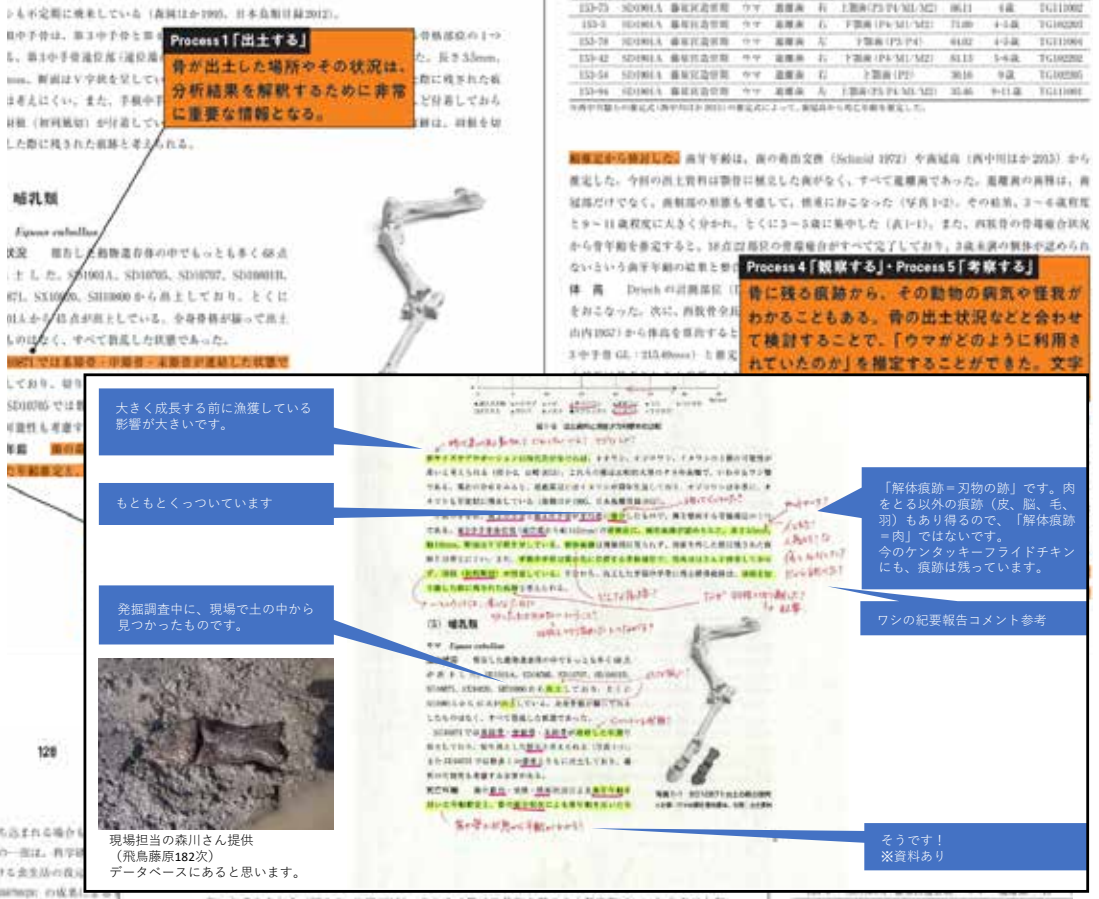
図録の編集作業では、デザイナーの大溝さんが、論文や発掘調査報告書に掲載した図や写真をわかりやすく、おもしろいデザインに変えてくださったことがとても印象に残っています。私たちが普段おこなうような学会発表や論文では、資料やデータをきちんと伝えるという部分が何よりも重要になります。そのため、研究者ではない一般の方々へ向けた講演や展示・図録でも「ちゃんと伝えよう」という意識が強すぎてしまい、「資料はきちんと並べる」、「魚の図は全身がみえるように」など固定観念に捉われ過ぎていたかもしれないと感じました。そして、専門的な研究成果にデザインなどの力でわかりやすさがプラスされてこそ、多くの人が理解しやすい情報を届けることができるのだと実感しました。【山﨑】





── 研究過程と研究成果をつなぐ。

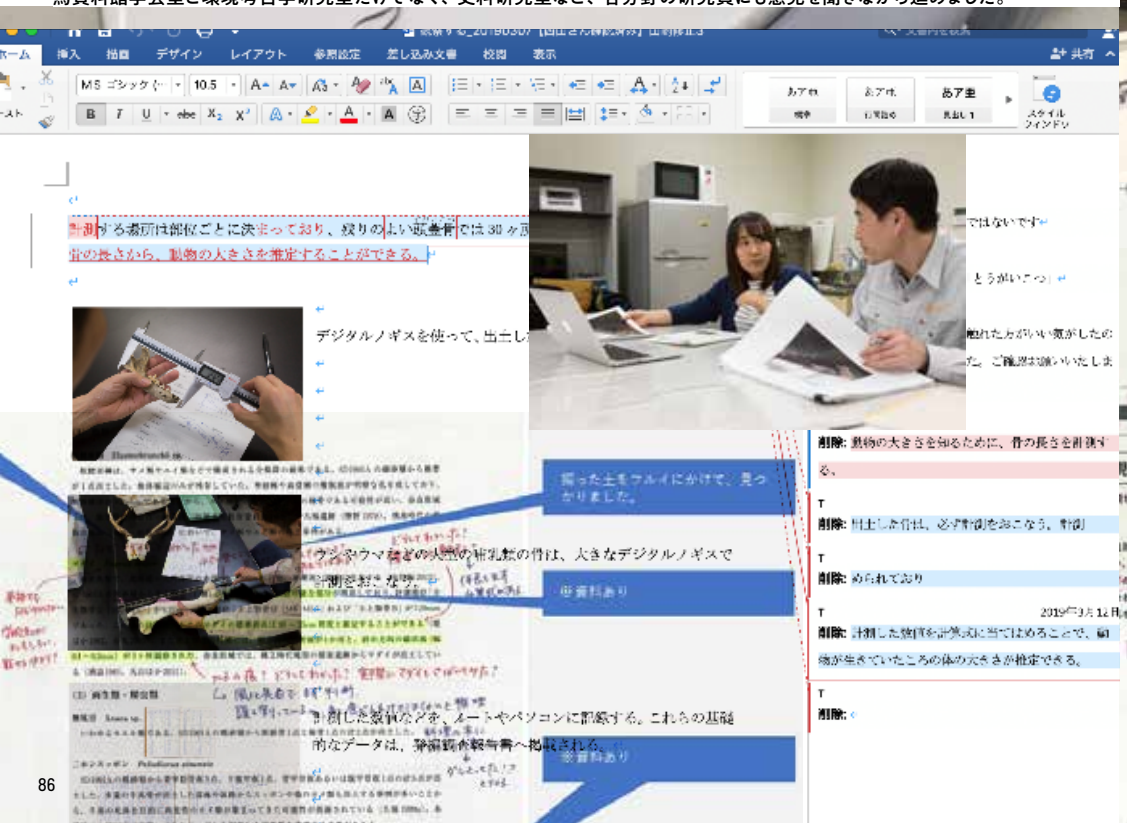
発掘調査報告書は、その専門性の高さから多くの人は読む機会がなく、どんな情報が掲載されているものなのかさえ知られていないと考えられました。そこで、「記録する」のパートでは、まず発掘調査報告書にはどのような情報を掲載するのかという基本的な内容の紹介をしました。
また、Process1～5までの過程でおこなった作業が、報告書のどのような部分で、どういうかたちになっているのかを示すことで、環境考古学研究室でおこなった調査研究を最終的にどのように社会へ発信しているのかを知ってもらおうと試みました。

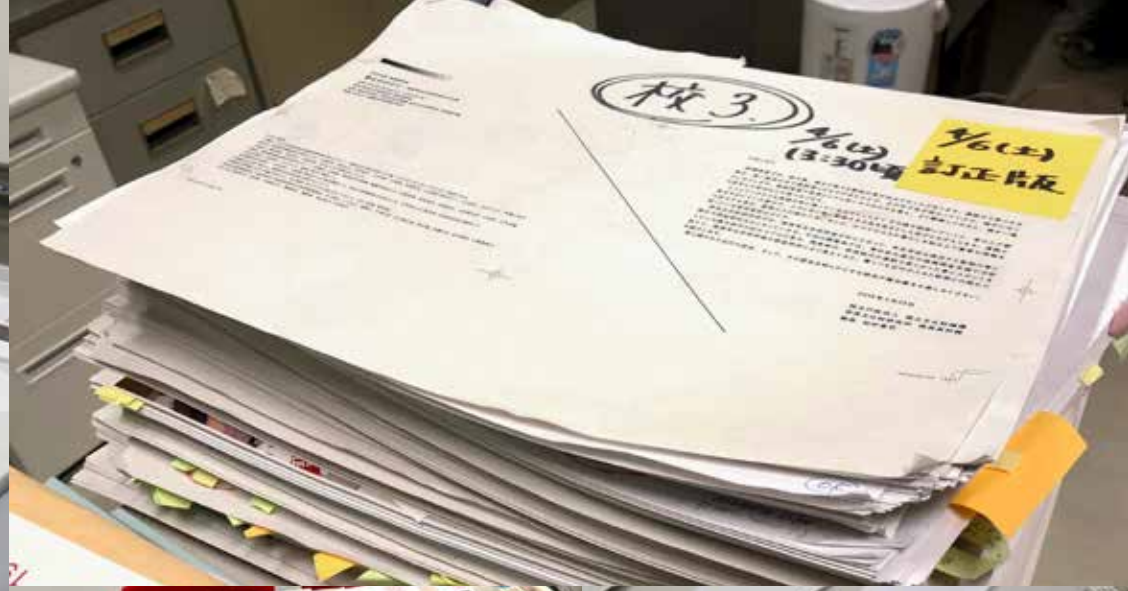


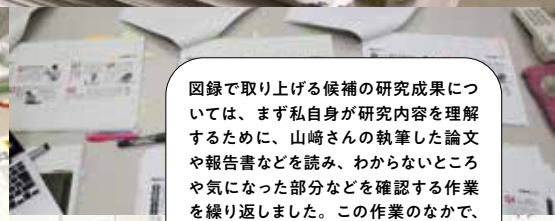
Process 1～5は、発掘調査の成果報告書ではどう活きてくるのか？

── アカデミックレベルの質は下げない。

専門的な情報を伝えるうえで、わかりやすくしたためにアカデミックレベルの質が下がるということにならないように気をつけました。骨以外の資料と照らし合わせながら歴史について検討する内容が出てくる「Process5 考察する」では、飛鳥資料館学芸室と環境考古学研究室だけでなく、史料研究室など、各分野の研究員にも意見を聞きながら進めました。







図録で取り上げる候補の研究成果については、まず私自身が研究内容を理解するために、山﨑さんの執筆した論文や報告書などを読み、わからないところや気になった部分などを確認する作業を繰り返しました。この作業のなかで、一般の人へわかりやすく伝えるためにはどれくらい噛み砕いて説明するべきなのか、また興味を持ってもらえるポイントはどこなのかという部分が明確になっていきました。【小沼】

写真の力で語る。

展覧会全体を通して、環境考古学研究室の仕事や調査研究成果をわかりやすく伝えるうえで、写真によって視覚的に情報を伝えることを非常に大切にしました。使用する写真もただ枚数を増やせば良いということではなく、伝えたい内容や撮影対象ごとに効果的な撮影方法や構図などを検討し、言葉だけでは伝わりにくい研究員の熱意や研究室のリアルな雰囲気も感じられる写真になるように意識して撮影しました。研究室の雰囲気を切り取った写真、作業の紹介に必要な写真、わかりにくい情報を補足するための写真など、何度も何度も環境考古学研究室に撮影に行きました。最終的に、骨ものがたり展関連で撮影した写真は6,591枚になりました。

「文字情報ではなく写真でわかりやすく伝える」「調査研究や研究員を魅力的に見せたい」という思いを写真としてかたちにするのは思っていたよりも難しく、納得がいく写真を撮れるまで試行錯誤を繰り返しました。撮った写真がイメージしていたものと違ったときには、後日再撮影をしたこともありましたが、ここまで写真にこだわった展覧会作りができたのは、研究所に写真を専門に扱う写真室という部署があったこと、機材やスタジオなどの環境が充実していたこと、そして最初から最後まで、私がイメージする写真をかたちにしようと何度も何度も撮影をしてくれた飯田さんの存在が本当に大きかったです。【小沼】

何を撮るのか？

図録を見た人が、まるで研究室をのぞいているような感覚で楽しめるように、「人」と「場所」にこだわって撮影をおこないました。

── 研究室の日常を写す。

研究員や研究室のスタッフにとっては当たり前の日常も、多くの人にとっては新鮮でおもしろいと感じるものがたくさんあります。そこで、普段は公開されていない環境考古学研究室のユニークな風景をできる限り掲載しました。

── 働いている人の目線を意識する。

研究員やスタッフが何を見て、どんな表情で仕事をしているのか…それを写真に切り取ることで、研究に対する熱意などを伝えたいと考えました。

── 働いている人しか知らない風景を届ける。

巻頭には、研究室で働くスタッフが毎日見ている朝の風景を使いました。まだ誰も出勤していない研究室の朝の写真を導入部に使うことで、これから仕事（ものがたり）が始まる雰囲気を演出しました。

この写真は、朝の7:00頃に研究室で撮影しました。朝日の昇るスピードが想像以上に速く、良いと思ったポイントでもどんどん光の当たり具合が変化してしまうため、かなり焦りながら撮影したのを覚えています。
また、撮影したデータの調整作業では、研究室の窓から入る木漏れ日の柔らかさや、薄暗い部屋の雰囲気を消さないように注意しました。【飯田】

── 道具から、研究員の個性や仕事の雰囲気を伝える。

調査研究に必要な道具類は、特に研究室の個性が出るポイントであると考え、各過程の調査や作業で使用する代表的な道具を紹介しました。

道具を並べた写真は、飯田さんも私も「かわいい」と感じたので、当初から図録に絶対に載せたいと思っていました。
また、この写真を通して「研究員ってこんな道具を使っているんだ！」と、仕事内容にも興味を持つきっかけにつながればという狙いもありました。【小沼】

どう撮るのか？

写真が雄弁に語るためにはどうしたらよいか、その撮影方法も固定概念にとらわれることなく、試行錯誤しながら１カット１カット、こだわって撮影していきました。

骨ものがたり展で使う写真は、「資料はスタジオで撮影する」などの文化財写真の撮影方法に捉われず、撮影する対象や伝えたいメッセージに合わせて最適な方法を小沼さんと模索して決めていきました。
骨ものがたり展では、撮影だけでなく最初の打ち合わせから企画に参加しました。このようなかたちで展覧会作りに参加したことは今までなかったので新鮮でしたが、撮影以外の部分も企画メンバーと一緒に検討をすることで、展覧会の全体像を把握できました。その結果、小沼さんが欲しいと思っている写真のイメージに共感しながら撮影を進めていくことができました。【飯田】

── 写真の構図を検討する。

「文章ではなく写真で見せる」図録にするために、伝えたいメッセージや研究員のリアルな姿が、臨場感を持って届くような構図を意識しながら撮影をおこないました。

作業風景の撮影では、私が撮影したい写真の完成イメージや、写真から何を伝えたいのかという部分については、事前に飯田さんと共有するように心がけました。そして、撮影方法や構図の細かい部分などは、撮影現場の状況に応じて飯田さんと２人で相談しながら写真の完成度を高めてくようにしました。【小沼】

── 様々な方法で撮影する。

骨ものがたり展に関わる写真の撮影では、今までとは違う角度から研究室の魅力を引き出したいと考え、通常のスタジオでの資料撮影や作業現場でのスナップ撮影だけでなく、文化財写真の撮影ではあまりおこなわない手法にも積極的に試みました。

作業風景などのスナップ写真は、状況が次々と変化していくのでスピード感が求められます。カメラの操作にあまり時間をかけず、最高の瞬間を逃さないようにするため、ピント合わせはオートフォーカスに設定し、ブレないシャッタースピードに固定して撮影をしました。また、人の撮影では、まばたきの瞬間もあるので、基本的に１つの作業で５カットほど撮影しました。【飯田】

スナップ撮影

スタジオでの撮影（影あり）

スタジオでの撮影（影なし）

スローシャッターによる撮影

魚眼レンズを使った撮影

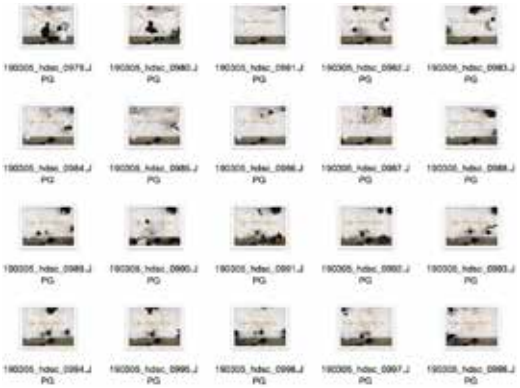
自然光を利用した撮影

写真を見た人に、メッセージを瞬間的に伝えるため、背景のボケ感を調整することで、写真の中で特に注目して欲しい作業や人を際立たせるようにしました。また、作業中の研究員の撮影では、作業中の真剣なまなざしや表情にフォーカスし、研究への熱意やひたむきな思いが伝わるように意識して撮影しました。【小沼】

左上：全体にピントがあっている写真
右上：背景をぼかした写真
左下：目線が追えない写真
右下：目線が追える写真

── 統一感を出す。

図録に掲載する資料写真は、基本的にすべて新規で撮影をしました。使用する写真の雰囲気を合わせ、写真全体に統一感を出すことで、図録の完成度を上げる狙いがありました。



スタジオでの撮影（コマ撮り）

スタジオでの撮影は、基本的には普段と同じ方法や機材で撮影をしました。強いて言うなら、普段の俯瞰撮影は資料のみを切り抜いて使うことが前提の影無しの写真を撮影することが多いのですが、今回は、小沼さんが資料の立体感や質感を自然な雰囲気で伝える写真を必要としていると感じたので、影を生かした撮影をおこないました。
どの資料の撮影でも背景を白にしたことや、配置にこだわったことも統一感を出すうえで重要なポイントであったと思います。特に骨などの出土資料や道具などを並べた写真では、小沼さんの完成イメージは、個々の資料をよく観察する写真ではなく、撮影対象の資料の一覧性が高く、洗練された見せ方をした写真だと感じました。そこで、そのイメージを再現できるように、俯瞰撮影や立面撮影など撮影方法を変えても、資料ごとの影の差が出ないような光の当て方や、陰影が強すぎる写真にならないように意識しました。【飯田】

飯田さんと小沼さんが研究室の作業風景をたくさん撮影してくれていたため、写真をメインにした展覧会や図録をつくることができました。2人は「何か良いよね」や「これかわいい」など、いつも楽しみながら撮影をしていました。特に写真の構図や撮り方ついては、よく話し合いながら撮影をしており、2人にしかわからない意思疎通が瞬時になされ、どんどん撮影が進んでいきました。
今回、展覧会や図録で使った写真は、私にとってはあまりに日常的すぎるので、正直、撮影時にはなぜここを撮影するのか不思議に思ったり、本当におもしろいのか心配でした。しかし、展覧会の感想で写真の評判がとても良く、「研究員がおもしろいと思うこと」と「来館者がおもしろいと思うこと」のズレを繋ぐような、新鮮で客観的な視点がとても大切なのだということを改めて気づかされました。【山﨑】

骨ものがたり
特別展イベント開催！
本日 13：30 ～
地下特別展示室にて
特別展の会場に
私が展示されます！

イベント① 「研究員を展示！」

【イベントの内容】

研究員による作業の実演

- 1mmほどの小さな骨の分類
- イノシシとシカの骨の同定

展示室を研究室に。

「研究員を展示！」では、環境考古学研究室の研究員やスタッフが展示の一部となり、骨の分類や同定作業などを実演しました。
展覧会の企画段階では、コンセプトのひとつである「リアルさ」をどのように演出できるかという部分を丁寧に検討しました。そのなかで、「研究員が展示されたらおもしろいんじゃないか？」「展示室が研究室みたいになっていて、そこに研究員がいたら、とてもリアルじゃないか？」という案が出ました。そこで、実際の資料や道具を用いて、研究員が普段の調査を展示室でおこなうことで、来館者がまるで研究室を訪れたような気分や臨場感を感じられるイベントを実施することにしました。
当初は2回開催の予定でしたが、好評だったため2回追加し、全4回開催しました。

── 研究員を展示の一部にする。

会場の空間デザインは、このイベントも意識しておこないました。キャビネットや事務机で研究室を再現したスペースには、イベントのない日は研究員の等身大パネルを置いていましたが、イベント当日は、そのパネルと本物の研究員が入れ替わるかたちで作業をおこないました。展覧会に何度来ても、新しい驚きと発見があるような仕掛けを意識しました。

イベント以外の日

イベントの日

同じ組織内での展示・イベントであったため、キャビネットに展示する資料やイベントで使う道具なども比較的融通を利かせることができました。イベントも好評だったので、追加開催ができましたが、このあたりは所内の展示部門だからこそできた対応だったかなと思います。【山﨑】

展示されている間は、こちらから来館者に積極的に話しかけることで「研究員」という存在を身近に感じてもらえるように意識しました。特に子供たちには、研究内容だけでなく「楽しそうに仕事をしていたな」という印象を持ってもらいたかったので、実物の骨を使ったクイズなどもおこないました。【山﨑】

── 研究員と気軽に話せるように。

研究員から来館者へ、また来館者から研究員に気軽に声を掛けてもらい、できる限り多くの人と交流するため、作業の実演は基本的には２人体制でおこないました。

イベントでは、普段通りの作業をして「ただ展示されている」だけでは、来館者は私たちに話しかけにくいと思いました。そこで、イノシシとシカの同定作業を来館者に手伝ってもらうようなかたちにしたところ、「専門家が仕事の一部を見せつつ、来館者と交流する展示」になり、双方向の交流が生まれたのを感じられました。【山田】

── 実物の資料を使う。

多くの人は、遺跡から出土した実物の骨はもちろん、標本や調査の道具を見たことがないと思います。環境考古学研究室の仕事をより深く知ってもらうためにも、普段の調査で使う資料や道具を展示室に持ち込み、できる限り研究室でおこなっている作業と同じことができるようにしました。

遺跡から出土した縄文時代の動物の骨を同定する作業では、来館者に実物を触ってもらうように心がけました。実際に資料に触れてもらうことで「なぜ歯がぐらぐらしているの?」「どうやって骨の違いを見分けるの?」などの質問を受けることが増え、骨やその研究に興味を持ってもらえたように感じられてとても嬉しかったです。【松崎】

歴史や考古学をあまり詳しく知らない人には、注目して欲しい展示資料のポイントや、自分自身がおもしろいと思った話を紹介することで、文化財や歴史に興味を持つきっかけを提供できるような対応を意識しました。
話していくうちに資料や研究に興味を持ってくださる来館者も多く、気になったことはすぐに研究員と話している姿から、関心が深まっているように見えてとても嬉しかったです。【小沼】

── 研究員と来館者の橋渡し役。

イベント当日は、イベント目的で来てくださる方もいれば、来てみたら偶然イベントをやっていたという来館者もいます。どんな来館者にもイベントを楽しんでもらえるように、飛鳥資料館のスタッフは、来館者と研究員の橋渡し役になって、研究員と話すきっかけを作ったり、「疑問に思ったことは遠慮なく質問しても大丈夫ですよ」というウェルカムな雰囲気作りを心がけました。

イベント②「体験！研究員のお仕事」

【イベントの内容】

導　入　骨に関するクイズ　子供向け
　　骨から歴史を読み解くとは？　大人向け
　　↓
体　験　同定体験
　　↓
まとめ　骨に残る傷跡の観察
　　↓
　　質問タイム

研究員になりきる。

「体験！研究員のお仕事」では、研究員が普段おこなっている骨の同定作業を中心に、研究員の仕事を参加者に体験してもらいました。参加者自身が研究員と同じ作業をおこなうことで、「研究員はどのように骨から歴史を読み解くのか？」「骨の調査では一体何をするのか？」など、骨から歴史を明らかにする研究を身近に感じてもらいたいという狙いで実施しました。
当初は、子供向けと大人向けの回をそれぞれ１回ずつ開催する予定でしたが、予想を上回る応募があったため、子供向けの回は２回に増やし、大人向けの回も会場のレイアウトを変更して、できる限り多くの人を受け入れる体制で開催しました。

骨に関するクイズで楽しみながら、骨から歴史を読み解くとは？どんな研究なのか紹介する。

導　入

イベントの導入では、まず環境考古学研究室でおこなっている研究について紹介しました。子供向けの回では、歴史や骨についても知らない参加者がほとんどなので、そんな子供たちにも楽しんでもらえるようにクイズ形式でおこないました。大人向けの回では、奈良県を中心に骨などが出土した遺跡や、そこから明らかとなった歴史について解説をしました。

体　験

研究員の仕事 同定体験にチャレンジする。

同定体験では、実際に遺跡から出土した骨を使って、イノシシかシカかを判断するという作業をおこないました。子供向けの回では、年齢の異なる子供たちが、それぞれのペースで進められるような時間配分を意識し、大人向けの回では、より難易度の高い骨を使うなど、参加者に合わせた構成にしました。また、同定時に調書を取りながら観察する作業も体験してもらうために、ワークシートを用意して、そこに観察してわかったポイントや同定結果などを記入してもらいました。

子供向けの回では、同定作業の答えをワークシートに書き込んであるのに、自分の答えに自信が持てず答え合わせに行けない子供が何人か見られました。そこで、悩んでいるようすの子供には、小声で「お兄さんもそう思うよ。さっそく先生に見てもらってね」と耳打ちして、作業を進めてもらうサポートをしました。【山田】

初めて骨を見る人に、どこを見て同定したらよいのか、どんなところに動物ごとの特徴が出るのかということを伝えるためには「言葉選び」が重要だと感じました。今回のイベントを通して、自分自身も改めて骨を色々な角度から観察し、できるだけわかりやすい説明の方法を探す機会になり、大変勉強になりました。【坂本】

服装まで研究員に。

実はこのコーナーは、会場でイベントの開始を待つ子供たちを見た西田研究員が即興で準備してくれました。「研究員の服を着て、本物の研究員気分になったり、記念写真を撮れたら子供も親も嬉しい！」というお母さん目線の機転がありがたかったです。研究員の作業着を着て喜ぶ子供たちがたくさんいて、このような記念撮影のできるスポットなど、色々な側面から研究員を体験できる仕掛けの重要性を再認識しました。【小沼】

講演などをすると、大人ほど「研究結果を知識として覚えたい」と思う方が多いように感じていました。もちろん歴史の楽しみ方は自由なのですが、「調査研究の過程をわかりやすく紹介する」という展覧会の狙いにあわせて、「実際に私たちがおこなっている骨の分析を一緒に楽しんでもらいたい」という気持ちでイベントの内容を構成しました。どの参加者も笑顔が多かったので、私自身も楽しみながらイベントを進めることができました。【山﨑】

まとめ

骨に残る傷跡の観察から歴史を読み解く。

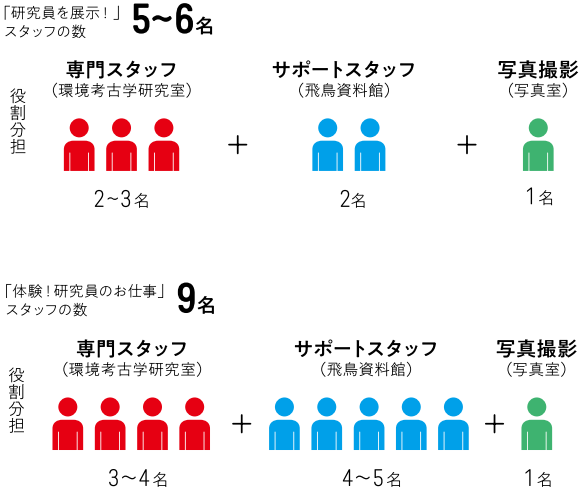
イベントのまとめとして、出土した骨からどのように歴史を読み解いているのかということについて紹介しました。遺跡から出土した傷跡が残る骨と、現代の食事のゴミとして出た骨を見比べながら、傷跡がどのようについたのか、そしてそこから見える古代の人々の姿について解説しました。
現代の食生活とつなげることで、骨の研究をより身近に感じてもらえるようにしました。

参加者全員に楽しんでもらうために。

骨ものがたり展で開催したイベントでは、研究員の調査研究を体験することで、研究員の目線や問題意識を共有する場を提供し、参加者全員が楽しめるイベントにしたいと考えていました。そこで、イベントの内容からスタッフの役割分担や対応など、細かい部分まで事前に何度も検討し、イベントを実施しました。

── アカデミックとホスピタリティの両方から参加者をサポートする。

「研究員を展示！」も「体験！研究員のお仕事」も、環境考古学研究室のスタッフは「専門スタッフ」として、参加者の骨や標本の取り扱いをフォローし、観察するポイントや同定のヒントを伝えるなど、骨に関する学術的な部分の対応を中心に担当しました。飛鳥資料館のスタッフは「サポートスタッフ」として、困っている参加者がいないか確認したり、参加者がスムーズに作業ができるような声かけをしたりと、参加者と専門スタッフの橋渡し的な役割を担当しました。
このようにイベントの内容に直接関わる部分と、イベント全体を円滑に進める部分のサポート体制を整えることで参加者の満足度向上につながるように心がけました。また、イベントの流れや役割分担などについては情報共有を徹底することで、スタッフ全員が同じ意識を持って参加者のサポートをするようにしました。



イベントの事前準備ではリハーサルをおこない、飛鳥資料館のスタッフと相談しながら、イベントで使う骨の分類や難易度の設定をおこないました。自分が比較的同定が簡単だと思う骨でも、専門家でない人にとっては難しいと感じることが事前にわかったので、イベント当日は、同定に有効な視点を意識してもらえるような声がけや解説を心がけました。【坂本】

── 手軽だけど本格派。入念なシミュレーションを繰り返す。

「体験！研究員のお仕事」では、打ち合わせを重ねるなかで、骨の同定作業なら参加者が理解しやすく、達成感もあると考えられたため、同定体験をイベントのメインにすることにしました。

通常、骨の同定では、①「部位の特定」→②「動物の特定」というのが基本的な流れになります。しかし、飛鳥資料館スタッフも交えたリハーサルをおこなった結果、①「部位の特定」から始めると、初心者にはかなり難しい内容になってしまうことがわかりました。そこで、参加者の年齢層・作業時間・会場のスペースなどを考慮し、イベントでは②「動物の特定」に重きを置いた同定体験をおこなうことにしました。

── 参加者にあわせたワークシート。

「体験！研究員のお仕事」では、子供向けと大人向けにワークシートを用意しました。子供向けのワークシートは、すべての漢字にルビをふり、同定の理由を書くメモ欄にはふきだしで観察のヒントを入れました。大人向けのワークシートは、同定の根拠やメモなどを自由に記入できるように、できるだけシンプルにしました。

このイベントで大切にしたのは、結果（正解かどうか）ではなく、判断した根拠です。答え合わせは私が担当したのですが、子供向けの回では「何でイノシシの骨だと思ったの？」など問いかけ、骨を一緒に観察しながら話を聞きました。子供たちは「イノシシとシカではこの部分の形が違っていて、縄文時代の骨はイノシシと同じ特徴だったから、イノシシだと思いました」のように丁寧に答えてくれたり、特徴を書き込んだスケッチを見せてくれたりと、こちらの想像以上に楽しんでくれたのが嬉しかったです。【山崎】

── 楽しんでもらうための工夫。

「体験！研究員のお仕事」では、参加者の満足度を上げる工夫として、骨スタンプ（子供向けのみ）とオリジナルの骨シールも用意しました。同定体験の正解者に配布した骨シールは、子供の参加者を意識して作りましたが、大人向けの会の参加者にも好評でした。

観察のヒントを入れた
子供向けのワークシート

骨がシールになっていたらおもしろいかなと思い、骨シールの作成と配布を提案しました。実際に、アンケートでもイベント参加の記念になると喜んでくださっている方が多く、嬉しかったです。【美濃】

── 動線を意識した会場レイアウト。

「体験！研究員のお仕事」は飛鳥資料館の講堂でおこなったため、解説の見やすさ、同定体験時に作業がスムーズに進むように動線を意識して、円形に並べた机に標本を置き、その周りに参加者の席を配置しました。1ヶ所にたくさんの参加者が集中して標本を観察しにくいということがないように、部位や難易度のバランスを考えて骨を配置しました。

── 資料は自ら調達。

環境考古学研究室で所有している資料のなかで、イベントで使えるものは限られています。参加者には、できる限り実物の資料を使って欲しいと考えていたため、研究室のスタッフ自らフライドチキンを食べて、イベントで使う骨を調達しました。骨を標本にするためのクリーニング作業も研究室のスタッフがおこないました。

数種類あるフライドチキンの部位が混ざらないように、食べた直後から個別に仕分けします。

他媒体や多言語でも発信。

イベントの内容や来館者の対応を担当した研究員・スタッフの意識したポイントなどは、『埋蔵文化財ニュース』180号でまとめました。研究員を展示したり、来館者に仕事を体験してもらうなど、「研究員との距離の近さ」や「仕事のリアルさ」などを大切にしたイベントを実施する裏側を紹介しました。また、図録をもとに、調査研究の6過程をまとめたダイジェスト版リーフレットも、環境考古学研究室の業務について国内外に広く発信するため、日本語・英語・中国語（簡体字）・韓国語の4カ国語で制作しました。

広報物

骨ものがたり
環境考古学研究室のお仕事
2019.
4/23 TUE
6/30 SUN
観察する
謎？
紐解く
考える
推定する
古代のくらし
骨から歴史を読み解く。
Works of Environmental Archaeology Laboratory
奈良文化財研究
休館日｜月曜日 ※ただし4/29[月・祝]～5/6[月・振休]は開館、5/7[火]は休館 開館時間｜9:00～16:30（入館は16:00まで）

展覧会の顔を作る。

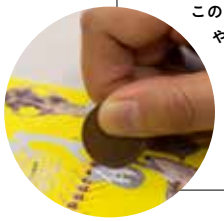
広報物の制作段階では、展覧会のターゲットやタイトル、展示内容などもあわせて検討していました。展覧会のイメージ作りにおいて重要となる広報物は、ターゲットを意識しつつ、見た人に「研究室の仕事感」や「自然史系の骨の展示とは異なること」などを感じてもらえるようなビジュアルにしたいという狙いがありました。広報物の制作では、これらの狙いやコンセプトなどについて、デザイナーの大溝さんとも一緒に打ち合わせをおこない、ポスター・チラシ・招待はがきを作っていきました。

B2 ポスター

広報物の制作にあたり、デザイナーの大溝さんへこちらの狙いや思いを明確に共有するようにしました。それを受けて、大溝さんが私たちのやりたいことをビジュアル化してくださり、ポスターやチラシが完成しました。【小沼】

最初の発想は「手」でした。研究室の仕事は、発掘から調査研究のすべてが、手と頭を総動員して歴史を読み解いていくことから、手にした骨をパズルを解くごとく並べていくと「骨」という文字が浮かび上がってくるビジュアルをイメージしました。「骨」という文字を骨で作るというチープなアイデアだけにディテールには神経を使いました。「骨」という文字がわかりすぎることなく、どことなく謎めいていて、道具やキーワードなどを散りばめながら研究室の現場感を出したり、印刷の線数も粗くしたりするなど、何だかザワザワするようなワクワク感を大切にしました。【大溝】

招待はがき



招待はがきは、大溝さんの提案でスクラッチを削ると骨や文字が現れるという仕様にしました。スクラッチを削るという仕掛けによって、はがきに書かれた情報が「見るもの」から「体験できるもの」になり、受け取った人が楽しみながら、展覧会に興味を持ってもらえるようなものに仕上がったと思います。

このような斬新なアイディアや視点は、研究所内のメンバーだけでは出てこないので、デザイナーさんと一緒に仕事をする楽しさでもあります。【小沼】

── 広報物を展示とリンクさせる。

広報物に掲載した骨の名前や部位などの詳細については、展示室の一角に紹介するコーナーを設けました。
掲載した骨に関連している展示コーナーも記載し、広報物と展示をつなげるようなコーナーにしました。

── 広く情報を届ける。

展覧会の開催を広く発信するために、広報物の掲示や配布だけでなく、奈良文化財研究所や飛鳥資料館の HP と Facebook 、広報誌『奈文研ニュース』での情報発信、そして、新聞やテレビやラジオなど、複数のメディアを併用しながら広報をおこないました。特に HPと Facebook では、会期の前から準備風景などの写真を公開し、会期中にも継続的に情報を出し続けることで、より多くの人の目に情報が届くように意識しました。また、今回は複数のテレビ番組に何度も取り上げてもらえたことで、普段はなかなか情報が届きにくい層の人へのアプローチにつながりました。

環境考古学研究室でのテレビ取材

展覧会開催前日の報道発表

『奈文研ニュース』での展覧会とリンクした情報発信

HP や SNS を活用した情報発信

ポスターから手作りした封筒を、お渡しした記者さんたちが「ポスターなんですか！」と驚いてくださって嬉しかったです。細かい部分までこだわってつくり込んだ展覧会だったので、記者発表でも小さなサプライズを用意しました。【辻本】

報道発表時には、取材に来てくださった記者さんたちに展覧会をより楽しんでもらおうという思いから、ポスターで作った封筒に配布資料を入れて渡しました。

展覧会名：
骨ものがたり ── 環境考古学研究室のお仕事

会期：2019年4月23日［火］～6月30日［日］（計61日）
会場：奈良文化財研究所 飛鳥資料館
主催：奈良文化財研究所 飛鳥資料館
後援：文化庁、近畿日本鉄道株式会社

来館者数：10,024名（1日平均164名）

開催したイベント

イベント1 「研究員を展示！」
5月10日［金］13:30～16:00 @特別展示室／参加人数：380名
5月17日［金］13:30～16:00 @特別展示室／参加人数：278名
6月9日［日］10:00～11:30 @特別展示室　○好評につき、追加開催／参加人数：54名
6月21日［金］10:00～11:30 @特別展示室 ○好評につき、追加開催／参加人数：30名

イベント2 「体験！研究員のお仕事」
6月9日［日］【子供向け】13:30～@講堂／参加人数：94名（第1部：43名／第2部：51名）
6月21日［金］【大人向け】13:30～@講堂／参加人数：32名
＊6月9日［日］の対象は小学生以上（小学生は保護者同伴）＊各日とも要事前申込・参加無料（要入館料）

来館者の声

来館者アンケートより、印象に残った展示品・コメントを掲載

○部屋全体が研究室の再現になっており見学者も研究員になったつもりで展示を見学できて良かった。素晴らしい体験型の展示だと思う。(20代 女性) ○研究のstepについてがイメージしやすく面白かった。(30代 女性) ○人の仕事として面白いと思った。(70代 男性) ○研究室の雰囲気を表現していたところ(予定入りのカレンダーなど)。(30代 女性) ○壁に掲げられていたパネルや研究に使っておられる道具や骨の標本などから研究の様子がとてもよくわかりました。(40代 女性) ○研究員さんの写真パネルとてもリアルでびっくりしました。まるで研究室におじゃましたみたいでした。お会いしたかったです。(40代 女性) ○予備知識もなく来ましたがその内容が充実していたので大変満足させていただきました。研究員の方々の苦労や喜びが伝わってくるようでした。○標本の数の多さに驚いた。その必要性も説明されてよかった。(70代 男性) ○特にないです。(最高すぎて)(10代 女性) ○研究室をそのまま再現しているみたいな展示がおもしろかった。(30代 男性) ○みんなとても面白かった。このような企画そのものが興味深いことでぜひみたいと思ってやってきました。若い研究者の方の熱意やアイデアがわかりうれしかったです。(70代 女性) ○研究室の風景が新鮮だった。(30代 男性) ○骨がいっぱいあって楽しかった、でもちょっと怖かった。(10代 女性) ○全て！現在の展示品の見せ方にとても驚いた。(70代 女性) ○同定用標本の引き出し これ見ても同定なんかできない…すごい。(50代 女性) ○環境考古学という名前を初めて知りました。古代の生活を知るうえで重要な研究なのに研究員さんが一人ということにも驚きました。もっと広まればよいと思います頑張ってください。(50代 女性) ○「環境考古学」という学問を今回初めて知りました。地道な努力を重ねて同定までの作業をされているのが展示を見て理解できました。研究員も展示されているのも面白かったです。(40代 女性) ○想像していたより見ごたえがあり3時間ほどすごしてしまった。(50代 男性) ○報告書の書き方の説明。(30代 女性) ○デスクを使った展示 壁のデザイン。(10代 女性) ○シカの下顎骨がずらっと並んでいるところは壮観でした。(40代 女性) ○今回の特別展内容や展示方法が斬新で大変興味深く拝見しました。(50代 男性) ○待ってました！の展示でした。ホネや標本は自然史系ミュージアムで見るので木簡や他分野との連携等報告書までの状況がわかってよかったです。植物での展示も待っています。土壌モノや地形と地名と発掘、また古気象学や太陽活動と考古学もお願いします。(50代 女性) ○引き出しの展示（タブレットとか裏話とか）(40代 女性) ○研究員の裏話 机も懐かしく内容もあるあるで面白い。(40代 女性) ○ムラサキインコ…驚異的な作業に敬服!! (60代 男性) ○出土した骨を細かく分類して保存していること、気が遠くなるような作業ですね。(60代 女性) ○骨から当時の生活様式などがわかるというのはすごいと思った。(60代 男性) ○地道な取り組みで解明されることに感心した。(60代 男性) ○骨からどの動物か！を特定するのはすごいなーとおもいました。(60代 女性) ○こんなにがちゃがちゃした壁の展示をみたことがない、新鮮だった。(40代 女性) ○研究室の書棚がパネルで再現されていたこと。(30代 女性) ○日頃の地道な研究に感心します。それにしても骨の小さな部位から動物、魚を特定できるのはすごい！ありがとうございました。(60代 女性) ○小貝の標本→あれだけ小さい骨をどうみつけたか不思議。(70代 男性) ○地道な作業によって新しい発見が支えられているのだと初めて知りました。小さいころにこのような展示を見ていたら興味を持つものが変わっていたかもしれません。子供たちがたくさん来てくれるといいですね。(50代 女性) ○とても見やすく特別展に関しては「参考書」の中にいるような感じがして非常に面白かったです。(20代 男性) ○研究室をのぞいているようで、何時間でも居たくなる感じでした。環境考古学の中でも動物利用のことをどうやって調べるのか、ぐっと伝わってきました。遺跡から出土した骨から分析次第でこんなにいろんなことを引き出せるんですね。展示のやり方がとっても素敵で図録もかっこいい！(50代 女性) ○報告書 それまでの過程もすべてわかりやすくとてもおもしろかった。(40代 女性) ○馬の年齢が歯の長さで分かるのはとてもおもしろいと思った。(10代 男性) ○ハンズオンの展示は、こどもにとって関心を喚起するものでした。大人にとっても新たな発見が多く発信力のある企画でした。○骨は自分が食べて日頃目にする物であり、とても楽しくもっと知りたいと思いました。(40代 女性) ○山﨑健さんのことTVでやっていてメモして見に来ました。このような研究をする人がもっともっと必要ですね。○展示方法、デザインが秀逸でした。(40代 女性) ○プロセス1~5と報告書の関連を示したパネル。(40代 男性) ○資料の引き出しの画像がおもしろかった。(40代 女性) ○展示物がとても見やすく分かりやすいと思いました。こちらの博物館からまたほかの博物館に行ってみたくなるような展示でした。またきます。(30代 女性) ○全てですが、所員の方々が小学生に気軽に声かけし、丁寧に説明されていたのがとても良いと思いました。(60代 男性) ○部屋全体のデザインがとても良いとおもいました。○タブレットで色々な標本の中身を見せる展示。(30代 男性) ○内容がよかっただけでなく展示の見た目がよかったです。○各種骨の展示物に気の遠くなるような細かい作業に感動。(70代 女性) ○研究の雰囲気の多数の実物、カレンダーの遊び心もおもしろかった。(40代 男性) ○大きな骨から小さな骨までひとつひとつ無駄なものはないことがよくわかりました。整理整頓大変そうですね。(40代 女性) ○楽しかった、ずっといたかった。(50代 女性) ○とても楽しかった、研究の流れがこまかく展示されているのが分かりやすく楽しい研究員の方のパネル。(50代 女性) ○仕事の大変さと重要性をしりました。(60代 男性) ○引き出しの中に裏話があるのが良い。全体的にデザイン性がよい。(20代 女性) ○とても良い。もっと若い時に見てたら人生が変わっていたかもしれません。研究員の方の仕事の内容、大昔の文献ではない生活感が感じられる展示がおもしろかったです。(40代 女性) ○壁面全体を使った雰囲気づくり。(30代 男性) ○見てわかりやすいように工夫されていて楽しかった。(50代 女性) ○研究員(人間)のパネル。○骨ものがたり 勉強になった。(80代 男性) ○研究室の部屋の中をのぞいた気分になれて面白かったです。(40代 女性) ○特別展、ユニークなプレゼンテーションで魅力的でした。研究者の皆さんの取り組みがよくわかりました。息子もこんな風な研究者になってほしい。(40代 女性) ○とても楽しい企画展示でした。たくさんの人に見てもらいたいと思いました。楽しいひと時を過ごせましたありがとうございました。(60代 女性) ○特別展がおもしろかった！TV資料ではなく実際に見ることができて感動。Officeの様子もリアルで手を伸ばしてしまいそうでした。飛鳥寺から研究所にきてその流れがよかった。山﨑さんのパネルに会えてうれしかった。緑あふれる中とても清々しい気持ちになり骨のおもしろさとともに働く皆様のご苦労何よりも生き活きを感じました。人は動く＝働くことの大切さ喜びを痛感しました。もっと子供たちに知らせたい。(60代 女性) ○イノシシのアゴ標本 入口右側の大型パネルも迫力があった。これだけの仕事をしているのだと感心させられた。(60代 男性) ○展示方法に工夫をされていますが内容がもっと密であるともっと生かされると思います。(40代 女性) ○壁のパネルすべて。(30代 女性) ○引き出しの上に貝を置いてあってそれを当てるっていうのが研究している人みたいになれて面白いなと思いました。(10代 男性) ○作業内容の理解しやすさデスクや資料の展示が斬新。(20代 女性) ○細かい骨がクリーニングされ分類され保存されていることに驚きました。私なら分類してる途中で面倒になって捨ててしまいそう。あと展示の仕方がポップでよかったです。(40代 女性) ○展示のデザインがおしゃれでよかったです。(30代 女性) ○発掘の状況から分類作業（特別展）の紹介、そして結果（成果）があり、とても説得力がありました。(40代 女性) ○ポスターに掲載した骨について紹介されているのが面白いと感じました。展示室内のどこでどのようにその骨たちが展示されているのかも書いてくれていてより興味をもって見学することができました。(20代 女性) ○骨の分析をしていくのに文字資料だけではなく実際の遺物と結び付けて考察していくのだろうけどものすごーい労力忍耐が必要だろうなと思った。(40代 女性) ○雰囲気が好きでした。○報告書の展示。考古学の研究のまとめ方が新鮮だった。(男性20代) ○大学で動物考古学を学ぼうとしている私にとって非常に勉強になる特別展でした。骨についてだけでなく、それらに関わる研究者の方々についてもよく分かる展示で、私も骨にまつわる研究がしたい。と今までより強く思わせてくれました。研究の過程でいつか環境考古学研究室の方々と関わることが出来ましたらこれ以上ない幸せです。ありがとうございました。

研究所に寄せられた文化財・博物館関係者の声

飛鳥資料館学芸室や環境考古学研究室に寄せられたメールなどを一部抜粋
※ご本人にご了承を得て掲載しています。

骨ものがたり展では、歴史や文化財にあまり接点のない人をターゲットに、わかりやすさを意識して展覧会を作りました。しかし、結果的には一般の方だけではなく、博物館や大学等の研究者や学校の先生などからも多くの反響をいただき、幅広い分野の人に楽しんでいただけました。

● 限られたスペースを最大限に活用されたスタイリッシュな展示に大変感動しました。当館に帰り、他の職員にも紹介したところ大変好評で、週末に観に行った職員もいたようです。当館でも近頃博物館の役割や仕事などをミニ企画展として紹介をしているところでして、ストーリー性やみせ方など参考にさせていただきたい工夫がたくさんありました。

● 必ずしも広いとは言えないけれど、ちょうどいいとも思えるその展示スペースに、程よく内容が盛り込まれていて、完成度の高さを感じました。何から何まで良くできていたと思ってしまうほどの展示に、なんとか伺うことができ、実際に拝見できて良かったです。今年は既に60本ほどの展示を見ましたが、今のところこの展示が一番と言えるかもしれません。もし見逃していたら、一番とも言える訳もなく、やっぱり見れて良かったです。

● 展示や企画・イベント・広報も含めて、今までにないユニークな特別展でまた飛鳥資料館に来たいと思うお客さんが増えるのではと思いました。ぜひこれからも、楽しい展示・企画をお願いいたします！

● 骨ものがたり、こんな展示ができたらいいなあ、と思う展覧会でした。僕も随分前にお仕事紹介系の展示をしたことがあるのですが、泥臭くなりすぎたり資料展示とのバランスがうまく行かなかったなあとか反省点がありました。この展示では仕事紹介の展示ストーリーがわかりやすいながらも素敵なデザインも相まって資料にも興味が湧いてしまう。そして個人的には最後の報告書のコーナーがとても惹かれるものでした。そしてみなさんのチームワークとアツさを感じました。

● これまで、いろんな博物館で舞台裏を紹介する展示が試みられ、いくつかの展示にも関わって来ましたが、今回の「骨ものがたり」ほど、研究者と展示チームが一体となった舞台裏展示は初めて観ました。図録や展示のデザインも斬新で、いやはや、ほんまに観れてよかった貴重な展覧会でした。

● 連休を利用して、関西各地の博物館で開催中の考古系の企画展、特別展を拝見しに行ったのですが、貴館の特別展がいちばん印象に残るものでした。よい特別展を企画していただいたことに感謝します。図録がまたなかなかいいですね。

● 早速スクラッチはがきが話題になっています。これは意表を突かれました。

● 見れば見るほど楽しくていい図録ですね。何といっても写真の多いこと！他の展示の図録を思い出しても、こんなに目で見てわかりやすいものってなかったように思います！ほんと、いい仕事してる！

● 図録も面白いですね。動物考古学としてはもちろんですが、考古学の分野で、これだけ詳細に分析・研究の方法が取り上げられたことはないのではないでしょうか？骨に関わる人間としては、うれしい限りです。

● お仕事の写真、きっとこれを見て、この道を志す若者が現れると信じます。

●『骨ものがたり』は、大変美しい図録で、同僚と一緒に見惚れておりました。

● 骨ものがたりは面白いです。なんとか見に行きたいと思っています。動物考古はもちろん、考古学の本当の楽しさを伝え得る良い企画であり、よくここまでと感心してしまいました。

● 従来の展示の概念を破って、動物考古学のおもしろさや重要性が120%示されており、大変楽しめると同時に勉強になりました。大切に活用させていただきます。予定は未定ですが、時間を見つけて、展示を拝見したく思っております。

● 骨ものがたり、いいですね！なんというか、奈文研、という組織ではなく動物考古学者の「人柄」がよく伝わる素敵な図録でした。考古学や文化財の社会化というのは、こういう所からはじまるんだろうなぁと痛感した次第です。

● まだ一般的にはなじみがない環境考古学を紹介するには打って付けの図録ですね。また、私の研究分野とも大きくかぶる内容で、今後私が担当する展示企画や図録作成の参考にさせていただきます。

● とても読み応えのある冊子で、しかも構成も写真・レイアウトもすべてが凝っていてオシャレに仕上がっていて、素晴らしいですね。招待状の、スクラッチカードまでセンスがあって、楽しませていただきました。期間中に、ぜひ一度、伺えたらと思っています。

● 内容は、上手にまとめられておられると思いました。動物考古系の方以外にも、この分野を知っていただくのに好著となりますでしょう。お金と時間があるのなら、“全く関係ない若い展示のプロ”と組みながらのものができると是非拝見してみたいと常々夢想しております。

● 斬新な体裁と一般に理解しやすい工夫が随所にあって、さすがと思いました。

● 情報（考え方や分析手法）を見せるという側面が強いけど、展示での文字数はかなり抑えられつつ、言葉は分かりやすい。演出でもフォローしている印象。感覚としては、三次元の図鑑を見ている感じ。面白かったです。

●「骨ものがたり」展の図録、研究員さんの一ヶ月のスケジュールがカレンダーにしてあるページの「19時までに学童迎え」って文字が飛び飛びに掲載されているのが個人的に胸アツでした。

● すごいなぁ…写真だけでもいい展示って伝わってきます。「一見難しそうなこと」、あるいは「自分たちと関係のなさそうなこと」ほどお客さんとの距離感をぐっと縮めてあげないと伝わらない。でもその実践はなかなか至難のわざです。行ってお話を伺ってみたくなりました。

●『骨ものがたり』の図録は写真が多く、面白いものになっていると思います。標本作製の写真は見るだけで臭気が漂ってきます。

●『骨ものがたり』も大変面白く、デザインや写真の見せ方も参考になりました。なかなか奈良まで行ける機会がないのですが、骨ものがたりの展示はぜひとも見たく、なんとか都合をつけるつもりです。

● 良い評判を度々耳にします。うちのかみさんもその一人です。表表紙と裏表紙の関係も好きです。静かで寒そうな現場と無地だけど日だまりに暖かさを感じるラボ裏。

● 図録は斬新な内容とスタイル！展覧会も拝見いたしましたが、素晴らしい発信と感激いたしました。

● 図録はとても垢抜けていますね。わかりやすく、惹きつけられます。こちらでもさっそく話題になっていました。展示も期間中にぜひ。

「骨ものがたり」ふりかえり

展覧会の企画メンバーに、グラフィックデザイナーの大溝さん、空間デザイナーの小西さんをお招きし、企画段階での思いやこだわりなどについてふりかえりました。

小沼美結　（飛鳥資料館 学芸室 本展主担当）
西田紀子　（飛鳥資料館 学芸室 本展副担当）
山﨑健　（埋蔵文化財センター 環境考古学研究室）
飯田ゆりあ　（企画調整部 写真室）
大溝裕　（グラフィックデザイン担当）
小西愛子　（展示デザイン担当）

展覧会について初めて聞いたとき

西田：私たちとしては、骨ものがたり展は大溝さんにグラフィックデザインをお願いしたいという強い気持ちがありました。最初に企画をお聞きになったときは、どういう印象を持たれましたか？

大溝：たぶん最初は小沼さんからお電話をいただいて、なんか骨の展示みたいなことを伺ったと思うんですけど。電話の時点では、はっきり展覧会の詳細とかよくわかってなかったんですけど、まあなんか小沼さんが必死やというのだけは伝わってきて。

西田：必死さっていうのは、小沼さんの話し方がですか？

大溝：電話でどんなお話を聞いたかよく覚えていないんだけど、一生懸命で必死なんだなというのが印象に残っています。僕らデザイナーって、仕事していくうえで、担当者の思いとかそういうものが一番大事というか。今回に限らず美術展とかでも、自分がその作家や内容を大好きとかそんなことはめったにないんですよね。めったにないから、展覧会の情報だけ聞いても別にすごくやる気が出るとかはないんだけど、展覧会の担当の人が熱意を持って話してくれることで、まあなんか力になれるんだったらやりたいなとかいう気持ちがどんどん湧いてくるので。

西田：確かに。熱くスタートしてますもんね、最初からね。小西さんは、この骨ものがたり展で初めて仕事をお願いしましたが、最初に企画の詳細を把握されたのは、打ち合せのときでしょうか。

小西：そうですね。企画の内容をちゃんと把握したのは、最初の打ち合わせで、小沼さんやみなさんから展覧会の狙いなどをまとめた資料を直接見せていただいたときですね。普段の仕事でも最初は企画内容を書類でいただいて、初回の打ち合わせで、実際に学芸員さんとか企画担当の方とお会いしてお話を聞くんですけど、学芸員さんが熱意を持って話してくださったことがおもしろいと、それを来館者にどうやったらそのまま見せられるかなって考えますね。ただ、担当の方に熱意がないといいますか「特に思いはないけど、やらないといけないのでやってます」という姿勢だったりすると、相手もしんどいし、私もしんどくなってしまうことがあります。それに比べて、骨ものがたり展では準備時間が少ないなど不安な部分もありましたけど、小沼さんに初めてお会いしたとき、自分のやりたいことを熱く明確に伝えてくれる感じとか、山﨑さんやみなさんの人柄を知って、これは絶対大丈夫だろうなって思えました。

仲介者を入れることがわかりやすさにつながる

西田：企画の初期段階では、環境考古学研究室の見せ方をかなり検討しましたよね。展覧会を通して、文化財や歴史に親しみを持ってほしいという狙いは一貫してあったのですが、それを実現させるための手段として「研究の過程」を見せるのか、それとも「研究の成果」を見せるのか等、議論していました。大溝さんと小西さんは、今回の研究室の仕事を展示としてかたちにしていくうえで、難しさなどをお感じになったりしましたか？

小西：フィールドワークに出た研究員さん目線で研究について紹介するという展示では、研究員さんの似顔絵パネルを設置して、研究員さん自身の言葉で語りかけるっていうのはよくあるんですけど、今回の場合は山﨑さん自身の語りではなく、客観的な小沼さんの視点で見た研究員や研究室の姿を見せることを大切にされていたので、私もそこがおもしろいって共感できるところが多かった気がしますね。

西田：小沼さんフィルターが一旦入ることによって、身近さや親しみやすさが出てくる感じでしょうか。

小西：そうですね。どうしても、研究員本人が紹介するかたちですと、「知って知って」という方向になってしまいがちなのですが、小沼さんのフィルターを通すことで、展示を見に来てくれた人へ一方的じゃなくバランス良く伝えられ、私自身すんなり受け入れられたように思いました。図録にしても展示にしても、小沼さんが取材した山﨑さんを見せたいっていうスタンスに筋が通っていることがすごく大事で、山﨑さんをただ「骨好きの変わった研究員キャラクター」として前面に出していたら、ちょっと違うものになっていたと思います。

研究員自身が展示品になる

西田：学芸室としては、できるだけ素の山﨑さんの研究なり人となりを出して、それがかっこよく見せられればいいなと考えていたんですが、山﨑さん自身は言わば展示品になってみていかがでしたか？

山﨑：研究室を再現することになり、研究員も展示したらおもしろいんじゃないと言ったのは私自身なのですが、正直、文化財や研究成果よりも研究員があまり出しゃばるべきではないという考えはずっと変わらないです。ただ、歴史や文化財などに興味のない人にも広く情報を届けようとすると、「古代でこんなことがわかりました」と研究成果を伝える従来のアプローチではダメだと思いました。そこで私自身が前面に出ることで「こんなやつも働いています」っていうことをきっかけに、歴史や文化財に興味を持ってもらえるのならいいかなという感じですかね。今回は、「歴史や文化財に興味のない人にも情報を届けたい」というコンセプトが明確だったし、そこにある小沼さんの思いにとても共感できたので、私が前に出ることで実現できるのであればと思えました。あと、他の博物館ではでき

ない、多様な研究員が在籍する奈良文化財研究所ならではの展示になると思ったので。私のまわりの人からは「展示パネルになったり、顔写真やスケジュールや本棚をさらしたり、ようやったね」って言われるんですけど（笑）。それはもう小沼さんや大溝さんや小西さんを信頼できたっていうのが一番あるのと、あと研究員目線で作ろうとしたら絶対に出てこない発想や視点で展示が作れる気がしたので。結果的に、図録も展示も専門家からの評判がとても良くて、「こういう展示がしたかった」や「こういう図録を作りたかった」っていう声が、今でも私のところに届くので、そういう意味でもやってよかったなあっていうのはありますね。ただ、やっぱり前面に出るのが好きかって言われたら、そうではないんですけど。

大溝：それは、僕もちょっと気にしていて。最初ポスター作るときも「顔写真とかはあんまり入れたくない」とかそういう要望があってもおかしくないっていうのを少し気にしていたんだけど、一切そういうのが出てこなかったんで、もう腹キメてやられてるんだなっていう風には感じましたね。

小沼：山﨑さんがすごく腹くくってくださっているっていうのは感じていました（笑）。研究員のスケジュールを載せるときには「お子さんのお迎えとかプライベートなことも全部出すことでリアルな研究員像を伝えたい」とか、ちょっと無理な私のお願いにもほぼ対応してくださって。ただ、これは山﨑さんとだからやれるというか、山﨑さんも私の狙いをわかってくださっていたからできたと思います。あとは、環境考古学研究室をテーマにした展覧会をやるのなら山﨑さんや研究室のスタッフの方など、普段は見えない部分にスポットを当てるのが効果的だと思っただけで、他の研究室だったら、またそこに適した見せ方を探したと思います。

大溝：今回、山﨑さんをフューチャーするっていっても、回顧展のように業績を展示するとかではなくて、山﨑さんはあくまで歴史とか研究のきっかけになるような立ち位置で入ってもらったので。そういう意味でも回顧展などと違うし、それが良かったのだと思うんですよね。今こうやって終わってみると、やっぱり考古学のなかでも特に骨っていうすごい専門的な分野で、いきなり展示品なり成果を見せても一般の人にはとっつきにくいので、じゃあそれに関わっている人（＝研究員）を介在させてやった方がみんなも入りやすいし理解もしやすいんじゃないかなっていうところで、こういうかたちになって、それが結果うまくいったと思いますね。

限られたスペースで展示を作る

山﨑：小西さんから見て、今回の展示室のスペース感ってどうでしたか？

小西：はじめは結構狭いなと感じました。今回は、調査研究の過程を順番に紹介するという割とストーリー的な流れがあって、どこからでも好きに見てくださいという自由動線の展示でもないので、最初は細長い展示室で上手く流れが作りにくいなぁと思ったんですけど、結果的にはコンパクトに間延びしないサイズでまとまってよかったです。この倍の広さがあったら、ちょっとどこかが間延びしてきたり、写真ばっかりで飽きてきたりとかしたかなと思うので。あと、会場となる特別展示室は、階段を下りてUターンして入るというわかりにくい入口だったので、マグロ模型の展示場所とかも悩みましたね。あと、マグロが想像以上に大きかった。

西田：あのマグロは、小西さんに入っていただく前に、結構こちらで盛り上がっちゃって（笑）。出土した骨から、実際のマグロのスケール感を見せたい、わかりやすくしたいという狙いで作ることを最初に決めていたんですよね。私、「あ、もうマグロは発注してるんですか…」って小西さんが言われてたのが印象に残っています（笑）。

小西：最初はマグロ、どうしようかと思ったんですけど（笑）。でも、やっぱりクライアントであるみなさんの要望や条件をどう空間にしていくかというのが私の仕事なので、今回はマグロありきでスペースなど色々検討を進めましたね。

西田：あと、予算が限られている中でもやれることとして、小西さんが壁面グラフィックにタペストリーを使うという案を出してくださったのも私たちにとっては力になりました。

小西：展示グラフィックまで大溝さんが引き受けてくださって、展示空間を盛り上げてくださったのですごく良かったです。タペストリーを使って、壁面を大きなグラフィックで展開しようという提案をしたものの、図録もちょうど忙しい時期で、大溝さん以外の人がデザインして図録と違う雰囲気になったら、という懸念もあったので、やってもらえて本当に良かったです。

西田：発掘調査報告書を展示したコーナーは、確か、森美術館で「藤子不二雄Ａ展 ―Ａの変コレクション―」で、展示品の後ろに漫画のイラストを壁面全体に散らしているのを見て、発掘調査報告書の見せ方に応用できるのでは？と思って、そのお話を最初したんですけど。そこからどういうかたちで報告書の紙面を出したら研究成果を見せられるのかという部分は苦心しましたよね。でも、このコーナーは、来館者の多くが案外立ち止まって読んでくれて、すごく手応えを感じましたね。

小西：とても評判よかったです。私の周りでも。

小沼：この発掘調査報告書の部分は、図録と展示で見せ方を変えているんですよね。それぞれの媒体に適したかたちで出すためにどうしたらよいか特に時間をかけて検討したので、好意的な反応が多くて嬉しかったです。

山﨑：小西さんは打ち合わせだけじゃなくて、造作とか陳列作業もすべて立ち会ってくださって、しかも、すごく楽しそうにされていた印象があります。

小西：単に展示物が好きなんで。図面上でケースや資料を並べていっても図面での表現の限界があるので、いざ展示するときに細々した調整や、情報共有していたつもりでもお互いわかってなかったことが現場で出てきます。本当はすべての情報が伝わるような図面を書かなきゃいけないんですけど、私が「ここをかっこ良くしたいんです」って言ったら、工務店や造作を担当してくださる展示現場の方たちが補足してくれる。そういう現場でのライブ感というか、作っていく過程がおもしろいので。

西田：マグロ模型もそうでしたよね。天井に吊るときに、高さどうしようとか、階段を降りてきたときにどう見えるかとかを考えながら、現場で調節しながら最終確認を一緒にしてくださいましたよね。

小西：企画段階で不安だったところって、でき上がった展示でもやっぱりうまくいってないことが多くて。施工の段階になって、どうしても仕方ない、という変更もありますが、その時に自分が立ち会っていたら、なぜそうなったかが分かり対応の仕方もあるので、できるだけ仕上げまで立ち会って、納得して一緒に作りたいですね。

写真を全面に出す

西田：今回は、図録でも展示でも、わかりやすく情報を伝えるために写真を大切にしました。写真はほとんど飯田さんと小沼さんのペアで撮っていて、二人が撮影した写真は、実はいつもの奈良文化財研究所のスタイルとはちょっと違うのですが、大溝さんがデザインをしていくうえで二人の撮影はどう見えていたんでしょうか？

大溝：どうもなにも、小沼さんは写真一枚とっても、かなりイメージがあるんで、僕の方からは二人にお任せみたいな気持ちでしたね。ただ、今回この図録も展示も写真をメインに構成できた要因として、やっぱり飯田さん、ひいては奈良文化財研究所の写真室があったというのが大きいと思いますよ。それがなかったらできないと思うんですよ。それこそ、もう僕が展覧会のお話を聞くずっと前から、二人で時間を見つけては色んな研究室に行って写真撮ったりされていましたし、それこそ入稿直前で「ここに入れる写真ない？」って聞いたら「じゃあ朝から撮ってきます」と全部用意してくれたじゃないですか。

小沼：今回は、見て楽しい図録とか、視覚的に情報を伝えることを大切にしていたので、写真には本当にこだわって何度も撮影しました。基本的に、飯田さんと私で一緒に撮ってるんですけど、図録の入稿前とか私の方も時間が本当になくなってきて。そういうときは飯田さんに「ごめんなさい、これ撮りに行ってきてもらっていいですか」みたいにお願いすることもありましたね。

飯田：「はいはーい」ってね（笑）。

小沼：「これ1カット撮り直し、あ、これも1カット撮り直し」っていうのが五月雨に出てしまったこと

もあったんですけど、飯田さんはそういうことにも全部対応してくれて本当に助かりました。図録に載せる写真は、3月末の入稿直前まで撮ってましたね。今考えても、よくそこまで粘って撮ってたなって思います。大溝さんに「他の仕事ないんですか？二人がずーっと撮ってるから（笑）」って言われたことあります。

飯田：「暇なの？」みたいなね（笑）。

大溝：でも、そうでなければできてないと思うんですよね。

思いを共有する

西田：あと横で見ていて驚いたし、良かったなと思ったのが、小沼さんと飯田さんが好きな写真と大溝さんの好きな写真が同じなんですよね。それがすごいなーと。

大溝：でも僕は、逆に言うと小沼さんが好きなものはわかっているから。

西田：それはクライアントが好きなものがわかるんですか？それとも、小沼さんだからわかりやすいんですか？

大溝：小沼さんは割と好きとか嫌いとかちゃんとはっきりしているじゃないですか。だからわかるんですけど、当然はっきりしてない人とかイメージがない人とか色々いるので。でも僕としては、小沼さんが、「私はもっとカチッとした堅い写真で暗い重厚なのが好きなんです」って言われれば、「じゃあすごい重厚なカタログを作りましょうか」となるだけの話なんですよ、いってみれば。

山﨑：最初に表紙案を見たとき、小沼さんと飯田さんから、発掘調査現場の写真を大溝さんが選んでくれた、わかってくれているっていう喜びがすっごくにじみ出ていたなと横で見ていて感じて。実際、「骨ものがたり」というタイトルで、この現場写真を表紙に持ってくる意外性はすごく評判はいいですけど。

小沼：今回って骨の美しさとか骨のおもしろさを語っている内容じゃないんですよね。「この骨ってどこから来るの？」っていったら発掘調査で見つかるものだから、現場写真が表紙にくることで、そこから始まっている感じや、環境考古学研究室がある意味っていうのも伝わるんじゃないかなって。でも、この現場の写真は明確に使いたい場所が決まっているわけではなくて、「好きな写真」ってフォルダに入れて大溝さんにお送りしていて。なので、そこから大溝さんがピンポイントで選んでくれたっていうのに驚いたし、嬉しかったです。

大溝：それまで、小沼さんは散々僕に色んなことを言っていてね、表紙だけのことでなく。僕の方で小沼さんに忖度して選んでいるわけでもなく、小沼さんの思いみたいなのをずーっと聞いているから、小沼さんモードになっていくんですよ。写真とかを選んでいても「あ、これだったら小沼さんも好きじゃないかな、いいと思うなぁ」ってぐらいのことなんですけどね、たぶん。

西田：それがすごい。さっき、好きなものがわかるってお話があったんですけど、そういうときって大溝さんも好きになるんですか？

大溝：好きになっちゃうんですよ。別に僕は、最初骨に何の興味もないわけじゃないですか。でも、小沼さんがこんだけ好きだ好きだ言ってると、好きになっちゃうんですよ。逆にいうと、今回に限らず好きにならないと仕事にならないですよ。

西田：小西さんも私たちと一緒に仕事をしていくなかで、見方が変わった部分はありますか？

小西：そうですね。元々研究の裏側の人達が見えるのは単純におもしろいと感じていましたが、みなさんが熱意を持って話してくださったので、そういう仕事や研究に対する思いをどう展示に生かそうと考えましたし、自分も興味を持って取り組むことで色んなアイディアにつながりました。

思いをかたちにする

西田：私たちが抱いている展示や資料への思いを、大溝さんはどのようにデザインに発展させていくんでしょうか？

大溝：僕はよく言っているんですけど、自分の中に何もないんですよ。何もないというか、空っぽなんです。担当の方から「骨の展覧会をやります」って言われても、「こういうのやりたい」っていうのが自分自身にあるわけじゃないし。なので、打ち合せに行くときの感じとしては、空っぽのバケツの中に、今回だと小沼さん西田さん山﨑さんの思いみたいなものとか色んなもの入れてもらって、それをかき混ぜてそこから大事なものとかないかなっていうふうにつくっていくので。逆にいうと、担当者や企画する側の人がなんか言葉にはできないんだけどもやもやしていることや、相談しているうちに違うと感じたこととかは、どんどん言ってもらわないと僕は何もできないという感じですかね。

山﨑：大溝さんは、コミュニケーション能力がすごいなって一緒にお仕事させていただいてずっと感じていて。デザイナーさん自身がこうしたいじゃなくて、こちら側がどういうことを求めているのか、どういう展示にしたいのかって部分をまずちゃんと受け止めてくれて。でも、受け止めるだけじゃなくてそれをふまえて、コンセプトとかやりたいことを一緒に考えてくださったので、そういうやり取りがとても楽しかったです。

大溝：僕にしてみれば、自分がコミュニケーション能力が高いとは思ってなくて。僕は色々な人と仕事するけれど、相手次第なんですよ。だから、今回の小沼さんみたいに「こういうのがしたい。私これが好き。山﨑さんをかっこよく見せたい」と、どんどん言ってくれる人もいれば、ほんとに形式ばった当たり前のこと以上のことは、その人自身が気持ちがないのかよくわからないけど、いくら聞いても伝わってこない仕事もあるにはあるので。だから僕がどうのこうのっていうよりも、そこは相手方次第かなといつもそう思っています。

西田：相手とちゃんとキャッチボールができると、大溝さん自身もどんどんデザインをかたちにしていけるし、逆に相手とのやりとりがないとそこから発展せずに終わってしまうんですね。

大溝：僕いつも言っているんですけど、やっぱり「好き」っていうのが大切なんじゃないかなと。小沼さんにしても、環境考古学研究室がおもしろいとか、社会的意義があるとか色々考えているとは思うんですけど、でもやっぱりそれよりも「私はこれが好きなんだ」っていうことを一番根っこというか中心においてやられているってことを一番強く感じたし、大切なことなんじゃないかなと思いますね。逆にデザイナーにお仕事頼んだら、なんかかっこいいものができて来るんだろうと思っている人がそれなりにいるんですよ、やっぱり。でも、それは僕すっごい困るんですよ。だからいつも「僕なんにもないですよ、空っぽですから」って。

山﨑：それで相手の思いや話を引き出すんですね。

大溝：そう、聞かないと、っていうのがあるし。結局デザインってなんの役割かっていうと、翻訳みたいなことだと思うんですよ。誰でもそうですけど、自分の仕事には言いたいこといっぱいあるわけですよ。その伝えたいことは全部自分たちでわかっているから、展示だってカタログだって作ろうと思えばできちゃうんだけど…。でも、そういう伝えたい情報をそのまま全部出しても、何も伝わらないのと一緒だから、それを一般の人に伝えるためには専門的なことを翻訳して伝える人がいると思うんですよね。で、そこで情報を整理してこうやりましょうっていうのがたぶん僕らデザイナーの役割であって、だから展示でもグラフィックでもデザイナーっていう人が介在する意味っていうのがあるんじゃないかなと。

山﨑：今回お仕事して実感したのは、デザイナーって自己主張が強いのかなって漠然と思っていたのですが、それは思い込みだったんだなと。あと、そのデザイナーさんのカラーや方向性にそぐわないものを発注しちゃったら失礼になるんじゃないかとか、デザイン案に対して、何が良くて悪いのかを判断できる基準を自分の中でしっかりと持てるだろうかとか、正直、最初は不安でした。でも、実際に一緒にお仕事すると、こんなにもこちらの意図を汲んでくださったうえに、自分が想像していた何歩も先のことをやってくださるというか、これがデザイナーっていう仕事なんだなっていうのを間近で見て感じましたね。

大溝：確かに大前提としてはそうなんですよ。ただ、小沼さんの思いを聞いて、じゃあこうした方がいいって出てくるものは僕の中からだし、僕の色が出ちゃうんですよ。

西田：でも、そのカラーが出てくるのが楽しいんですよね。「あ、大溝さんキター」みたいな（笑）

大溝：それぞれのデザイナーから出てくるものは違うから、今回誰に頼もうかっていう見極めは、結構難しいと思うんですよ。誰に頼んだらいいのか決めていくためには、日頃から色んなデザインされたものを見ていくことが大切だろうなと。

みんなで同じ方向を向く

西田：今回の展示って、企画メンバーの専門分野もバラバラなんですよ。小沼さんの気持ちからスタートしていて、小沼さんをサポートする意識は共通しているんですけど、それだけじゃなくて自分事として積極的に展覧会をつくっていく意識がそれぞれにあるから楽しかったし、こういうかたちにできたのかなって、ふりかえって思うんですよね。

小西：今回、私はとても仕事がやりやすかったんですけど、それって奈良文化財研究所側のみなさんの仲の良さというか、意思疎通がしっかりとれていることが大きかったように思いますね。例えば、写真を撮影する飯田さんもちゃんと打ち合わせに入っていただけたから、キャビネットの写真を実物大で使いたいとかいう話も、「じゃあこれくらいのサイズや解像度が必要ですね」って話がその場でできたり、とてもスムーズでした。館側がまとまってない場合、「あとで担当者に話しときます」って言われて、伝え方次第では意図が伝わらずにずれが生まれてしまうこともあって、デザイナーとしてはつらいですね。

山﨑：まとまってないとか露骨に見えるんですね。

小西：担当者に熱い思いはあっても、他の要因からそれは通せないって言われて、そこで永遠に結論が出なくて、でもなんとなく進んでいって、みんながちょっとずつ諦めていってしまう。大溝さんも、こういうこと結構あります？

大溝：あります普通に。小沼さんって自分の思っていることをハッキリ言うっていうじゃないですか。でも、あるとこで仕事しても、その担当者本人が「いいな、好きだな」と思っても、素直に好きって言わないですよ。個人の意見より、上層部や館の色々な関係者に確認しますって話のほうが多い。で、今回の仕事で良かったと思うのが、小沼さんが組織内の調整もしたうえで「私はこれ好き」とか個人の思いも言ってくれるじゃないですか。だから非常にやりやすいんですよ。僕ら結局デザインするときに一番大事なのは、仕事を頼んでくれた人だし、それでやる気になっているんですよ。だから今回デザイン出すときに一番最初にイメージするのは何かっていうと、小沼さんがおもしろがるか、ビックリするかってことなんですよ。当然、広報物を作るときに、大前提はこれで人が来てくれるかなって考えるけど、そんなのわかんないですよ、はっきりいって。だから、やっぱりまずは担当の窓口の人のことを頭に浮かべてやるんですよ。でも、それが担当者の気持ちが見えない組織だと、僕自身も誰に向けてやってるのかわからなくなるんですよね。そうすると全然うまくいかないし、やる気も起こらないし、っていうことは多いんですよ。

西田：強い核みたいなものがきちんとあって、それをブラさないっていうことがやりやすさにつながるんでしょうか。

小西：企画に関わるみんなの覚悟みたいなものが大事だと思いますね。あと、色々な博物館の展示を見て思うのが、客観的な視点が明らかに欠けている場合もあって。単純に誰が読むんだろうっていう文字だらけになってしまっている解説パネルとか、デザインされたチラシでも、あんまり打ち合わせもせず作ったんだろうと感じるような、展示意図と全然違うものになっていたり。でも、そういう「自分たちだけでうまくいけてると思っちゃっていることに気づけてない」っていうのは一般の人来館者にも伝わってしまうと思うんですよね。悪い言い方すれば、独りよがりな展示になってるなって思うのが結構あるんで。そういうときに、デザイナーの手を入れなくても、打ち合わせに外部の人が参加するだけでだいぶ変わるんじゃないかなと思うんです。

西田：展示って色んな人に見てもらうものだから、作る過程でも色んな人と関わることで良くなっていく部分がありますよね。ともすれば、「館内のメンバーですべてやればいいじゃない、手作りでやればいいじゃない」という意見もあるんですけど、やっぱりそれぞれのプロがちゃんといて、そこに依頼する意味はあると思うんです。あと、展覧会をつくる過程で、完全に所内の人間だけでやるんじゃなくて、やっぱりそこに大溝さんのグラフィックのセンスだったり考え方、あるいは私たちの気づいてないことを引き出す力とか、小西さんの空間につくり上げていく力っていうのが加わることで、私たちが楽しいだけじゃなくて色んな人が楽しめて、色んな角度からの発見があるように、結果として展覧会で多くの人の心を動かせたのかなって気もするんですよね。

小沼：大溝さんや小西さんも一緒に楽しいって思ってくださっていると思うと、私たち所内の人間だけが内輪で盛り上がっているんじゃないとか、きっとたくさんの人にも魅力が伝わるはずだって安心して進められるんですよね。反対に、相談しているなかでちょっと違うんじゃないってなれば、一旦立ち止まって一緒に考えてくださるし、同じ価値観を共有できたから、「骨ものがたり」をどんどん深めていけた気がします。

大溝：今回、小沼さん山﨑さん飯田さん西田さん、みなさん楽しんでやってるじゃないですか。意外とこんな仕事少ないんですよ。なんかこっちの方が、企画の意図をくみ取るとか寄り添うとかそんな話ではなくて、みなさんが楽しくやっておられるから、こっちも普通に楽しくなるだけの話なんですよね。他の仕事だと、クライアントにも色々な担当者や立場の人がいて、そこがほんとにみんな一枚岩でこれを成功させようと思って一致団結してやってるかていうと必ずしもそうじゃない場合もあって。そういうなかでの軋轢とか僕らは敏感に感じ取るし、そうなってくるとなかなかうまくいかないんですよ。

西田：そういう意味では、学芸室だけでなく環境考古学研究室の山﨑さんを巻き込みながらやっていたことの良さも所内的にもあったかな。主担当が一人で進めると所内外の調整で心が折れてしまいそうになるときもあるので。今回は方向性や信念を共有できるチームでまとまった強さもあったのかもしれないですね。

大溝：ぼくはずっと思ってたのは文化祭みたいだなって。

一同：（笑）

西田：私たちもおんなじこと言ってた（笑）。

大溝：模擬店の準備してるみたいだなと思いながら。

西田：楽しみのテンション的には、みんなそんな気持ちでいたんですけど、アウトプットのクオリティは、ナショナルセンターとしていいものにしようと思っていましたね。あと、いつも展示をつくるときって、時間やお金の都合で諦めるしかないことがあるんですけど、今回は「やりたい！」って誰かが言うと、「よしやろう！」ってみんな乗っかってくるところがあって、結構全部やりきったなっていう印象があって。

小沼：最初の案とは違うかたちになっていても、何かしらのかたちで実現できましたよね。

大溝：展覧会をつくるとして、原稿は書くけど図録の企画会社に編集も含めて投げちゃって、そういう企画会社がデザイナーに頼んで、きれいに、そつなく時間内にできてくる、そういう作り方もあれば、今回の骨ものがたり展のように学芸員とあーだこうだ言いながらできていく図録や展示もあるんですよね。

小沼：私は、他の人と一緒にキャッチボールしながらチームでつくるのが好きで。今考えると西田さんも山﨑さんも飯田さんもそういうタイプだったなって。大溝さんも小西さんもそこを大切にしてくださる方だったから本当によかったです。

西田：やりたいことが全部できた！

4/23
6/30

飛鳥資料館 研究図録 第23冊
「骨ものがたり ─飛鳥資料館 学芸室のお仕事」

【執筆・編集】　小沼美結（奈良文化財研究所 飛鳥資料館）
西田紀子（奈良文化財研究所 飛鳥資料館）
山崎健（奈良文化財研究所 環境考古学研究室）
【デザイン】　大溝裕（Glanz）
【撮影】　飯田ゆりあ（奈良文化財研究所 写真室）
奈良文化財研究所 写真室および研究員

【発行日】　2020年3月31日
【発行】　独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館
〒634-0102 奈良県高市郡明日香村奥山601
tel: 0744-54-3561

【印刷・製本】　株式会社ライブアートブックス

ISBN 978-4-909931-32-0